the FUTURE is WILD™
フューチャー・イズ・ワイルド
コミック版
驚異の進化を遂げた2億年後の生命世界
ドゥーガル・ディクソン
ジョン・アダムス
作画 小川隆章
双葉社

9784575299717
1920079012003
ISBN978-4-575-29971-7
C0079 ¥1200E
双葉社
定価:本体1200円+税

著者紹介

ドゥーガル・ディクソン
Dougal Dixon

1947年スコットランド生まれ。
セント・アンドリュース大学にて地質学を学ぶ。
出版社勤務を経て80年より・
フリーのサイエンス・ライターとして活躍。
日本でも話題になった「アフターマン」をはじめ、
数多くの著書がある。

ジョン・アダムス
John Adams

自然史関係の人気テレビ番組を数多く手がける。
ディズニー向けに制作された
「Amazing Animals」などで受賞歴あり。

小川隆章
おがわ・たかあき

アフタヌーン四季賞でデビュー。
海洋生物漫画「渺々(びょうびょう)」で、
ネイチャーコミックの旗手として好評を博す。

COVER DESIGN ● こじままさき for BodyDouble Inc.

theFUTUREisWILD™

コミック版
フューチャー・イズ・ワイルド
驚異の進化を遂げた2億年後の生命世界
ドゥーガル・ディクソン
ジョン・アダムス
作画
小川隆章
双葉社

コミック版

フューチャー・イズ・ワイルド

驚異の進化を遂げた2億年後の生命世界

（原案：ダイヤモンド社刊「フューチャー・イズ・ワイルド ～驚異の進化を遂げた2億年後の生命世界～」）

ドゥーガル・ディクソン
ジョン・アダムス
作画
小川隆章

Copyright ©Takaaki Ogawa
Under license of THE FUTURE IS WILD®
Adapted from the book THE FUTURE IS WILD, Copyright© The Future is Wild® 2003,published in Japan by Diamond, Inc. arranged by Rights World Agency
The Future is Wild name and logo are registered trademarks of The Future is Wild Ltd.

コミック版
COMIC VERSION

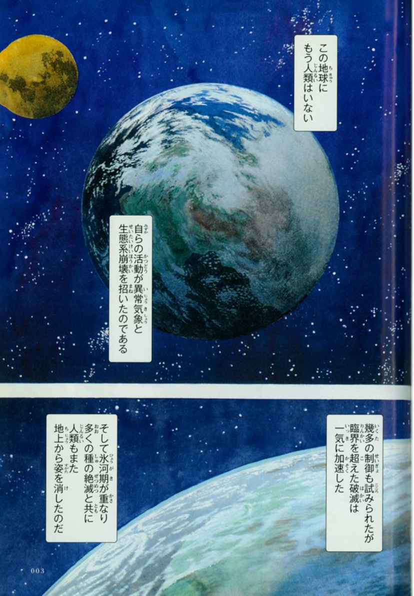
theFUTUREisWILD™
フューチャー・イズ・ワイルド

驚異の進化を遂げた2億年後の生命世界

(原案:ダイヤモンド社刊「フューチャー・イズ・ワイルド ～驚異の進化を遂げた2億年後の生命世界～」)

ドゥーガル・ディクソン&ジョン・アダムス
Dougal Dixon, and John Adams
作画
小川隆章
Takaaki Ogawa

双葉社


この地球に
もう人類はいない
自らの活動が異常気象と
生態系崩壊を招いたのである
幾多の制御も試みられたが
臨界を超えた破滅は
一気に加速した
そして氷河期が重なり
多くの種の絶滅と共に
人類もまた
地上から姿を消したのだ

だがそれらも遠い過去となり
今や新たな進化に満ちている

未知なる彼等の暮らしは
如何なるものなのだろうか

第一章
500万年後の世界
❖ごひゃくまんねんごのせかい❖

5 Million Years

目次

第一章 500万年後の世界 007
◆だいいっしょう ごひゃくまんねんごのせかい◆

北ヨーロッパ氷原 011
アマゾン草原 037

第二章 1億年後の世界 063
◆だいにしょう いちおくねんごのせかい◆

ベンガル沼地 067
大浅海 095
グレートプラトー 121

第三章 2億年後の世界 147
◆だいさんしょう におくねんごのせかい◆

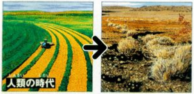
地球海 151
レインシャドー砂漠 183
北部森林 210

未来生物図鑑 241

500万年後の世界 5 Million Years

現代から500万年後の地球は、大氷河期時代に入っている。
人類が地上にいたころ、北極と南極を大きなドームの屋根のようにおおっていた氷は、
南北両方の極地から赤道の方向に向かってさらに大きく広がっている。
地球は冷たく乾いた星になり、たくさんの動物が絶滅していった（大量絶滅）。
わたしたち人類の姿も今はない。
500万年後の各地に暮らしている未来生物は、
こうした厳しい環境に適応し、生き残ってきたものたちなのだ。

北アメリカ砂漠
North American Desert



わたしたち人類の時代、
北アメリカはたくさんの作物がとれる、
肥えた豊かな土地だった。
しかし、畑が続く緑あふれる土地も、
500万年後の世界では、
乾燥した冷たい砂漠に変わりはてている。
(→245ページ)

アマゾン草原
Amazon Grassland

人類が生きていたころ、
アマゾン川を中心とする地域は暑くてジメジメした熱帯雨林だった。
しかし、500万年という長い時間がすぎるうちに、
たくさんあった背の高い木々は姿を消し、乾いた草原が広がっている。(→37ページ、244ページ)

北ヨーロッパ氷原
North European Ice

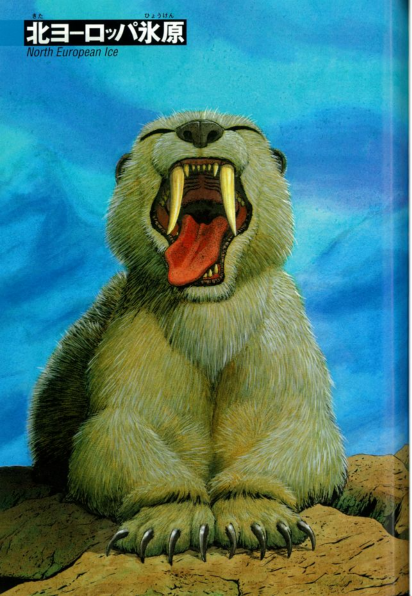
人類がまだ地上にいたころ、
質のよい農地にめぐまれた
北ヨーロッパでは、
街は活気にあふれていた。
ところが500万年後の北ヨーロッパは
地球上でもっとも
寒い場所になっている。
木もなく、雪や氷ばかりの荒地が続き、
まわりの海も凍りつくほど冷たい。
(→11ページ、242ページ)

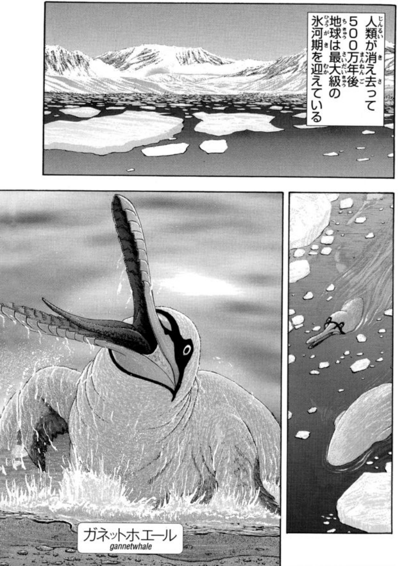
地中海盆地
Mediterranean Basin

かつて、地中海の岸辺は、
休みをすごす人たちでにぎわう
リゾート地だった。
それから500万年たつあいだに、
地中海の水は
まったくなくなってしまった。
この一帯には、あたり一面、
塩だけが白く残っている。
(→243ページ)

北ヨーロッパ氷原

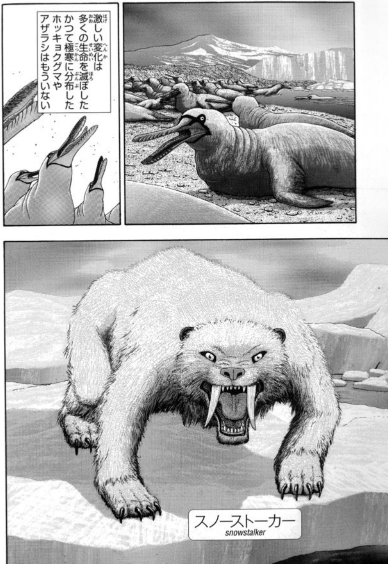
North European Ice





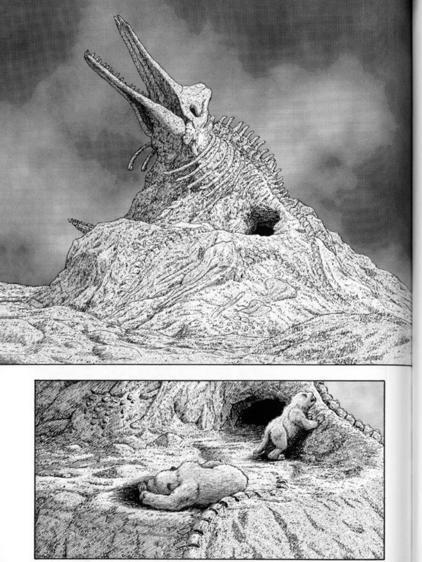
500万年後の世界

❖ごひゃくまんねんごのせかい❖

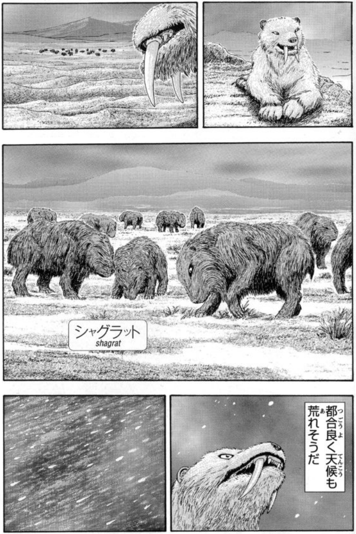

激しい変化は
多くの生命を滅ぼした
かつて極寒に分布した
ホッキョクグマや
アザラシはもういない
スノーストーカー
snowstalker

形態こそ似ているが
彼等は新たに進化
してきた生物だ
しかし
その基本は変わらない
生き 遺伝子を継ぐ事に
皆が懸命だ

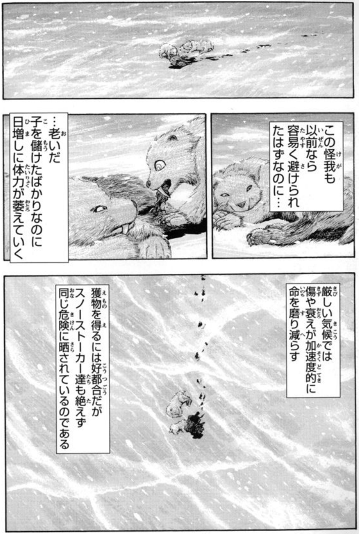
…楽な獲物だったのに
後ろからのガネットホエールに
まるで気づかなかった
母親はこのところ
失敗が増えている



クズリの末裔である
スノーストーカーは
獲物の数が少ない為
群れず 個々が広大な
テリトリーを持つ
此の平原で最も強壮な
彼女の縄張りは
この巣から展望出来る
理想的な一帯だ
早く…
あの子に もっと
狩りを教えなければ…


シャグラット
shagrat
都合良く天候も
荒れそうだ

傷付いた獲物が衰弱して
倒れるまでその血を辿る
スノーストーカーが得意
とする狩りだ
しかし雪が
跡を消す時は休まず
追わなければならない

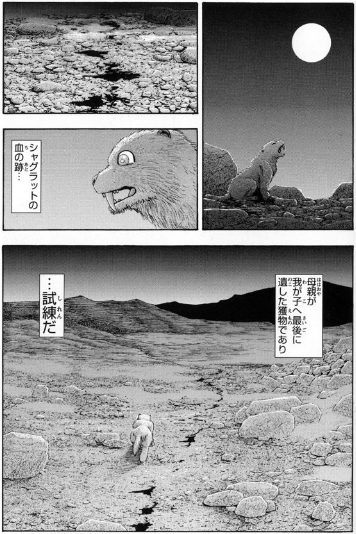

この怪我も
以前なら
容易く避けられ
たはずなのに…
…老いだ
子を儲けたばかりなのに
日増しに体力が萎えていく
厳しい気候では
傷や衰えが加速度的に
命を磨り減らす
獲物を得るには好都合だが
スノーストーカー達も絶えず
同じ危険に晒されているのである

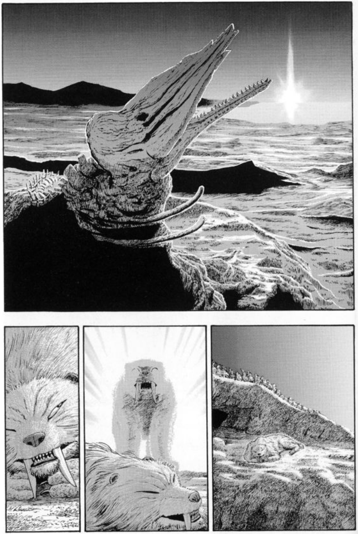
彼女の衰えを
見透かしたような
大胆な縄張り侵害だ

この子は幼すぎる
どんな生きる術を
伝えれば良いのだ
まるで癒えない
このままでは半日も
すれば歩けなくなる…

彼女自身には
必要の無い過酷な
狩りであった

それは一瞬の出来事であった

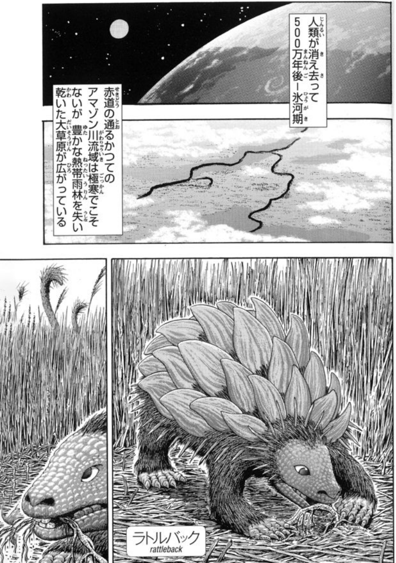

シャグラットの血の跡…
母親が我が子へ最後に遺した獲物であり
…試練だ



北ヨーロッパ氷原　END

アマゾン草原
Amazon Grassland

the FUTURE is WILD

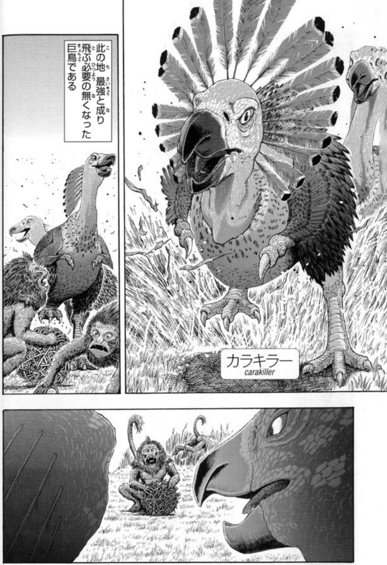

人類が消え去って500万年後ー氷河期
赤道の通るかつてのアマゾン川流域は極寒でこそないが豊かな熱帯雨林を失い乾いた大草原が広がっている
ラトルバック
rattleback

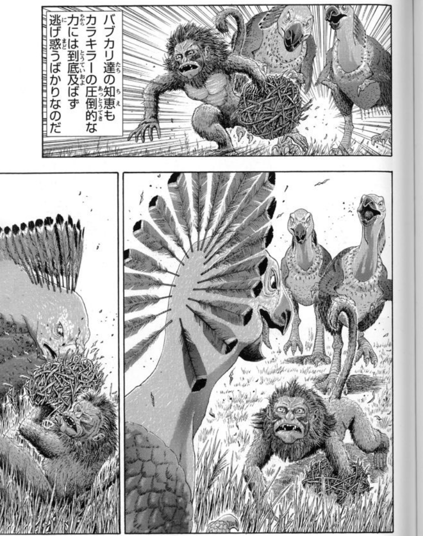
アマゾン草原
Amazon Grassland

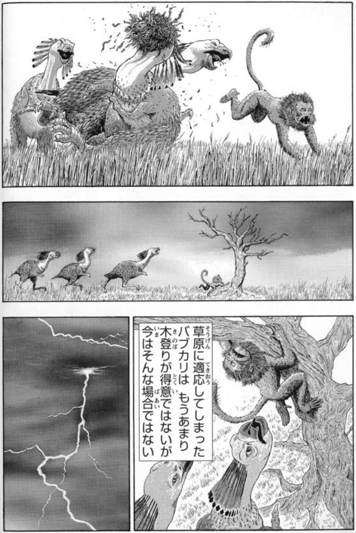
500万年後の世界

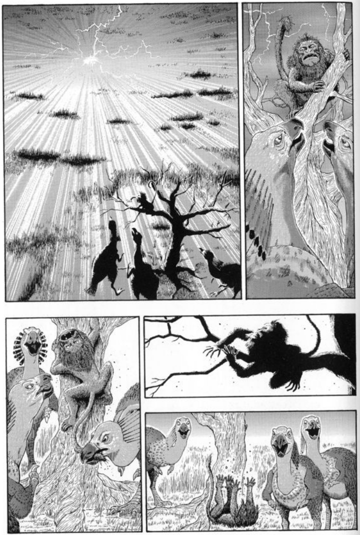
バブカリ
babookari
彼等は激しい環境変化を生き残った唯一の猿 最後の霊長類である
厚い装甲で防御したラトルバックは鉄壁だ 関わるのは時間の無駄でしかない

籠は彼らが草で編んだもので もちろん魚を捕る為の道具だ
知能は高く この群れのボスは特に優秀なのだが……


此の地 最強と成り
飛ぶ必要の無くなった
巨鳥である
カラキラー
carakiller

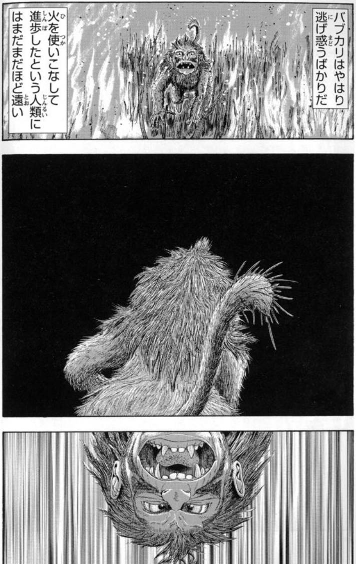

バブカリ達の知恵も
カラキラーの圧倒的な
力には到底及ばず
逃げ惑うばかりなのだ

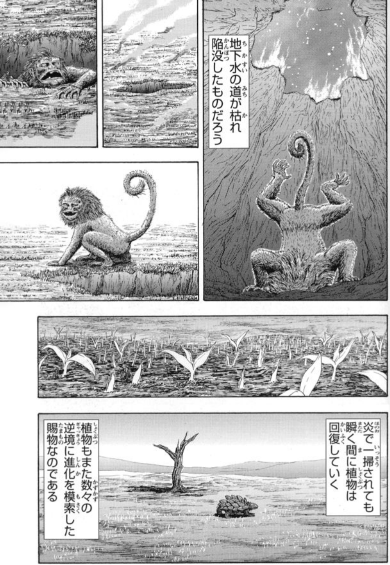

草原に適応してしまった
バブカリは　もうあまり
木登りが得意ではないが
今はそんな場合ではない

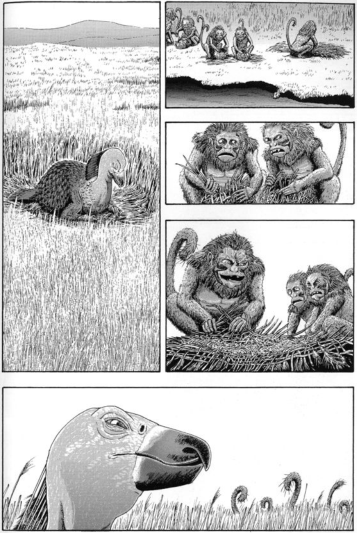


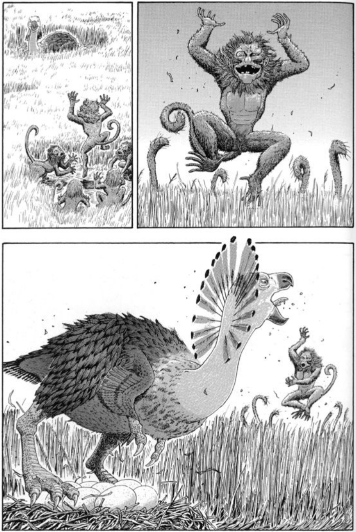
乾き切った草原では
落雷や太陽光が原因で
頻繁に火災が発生する

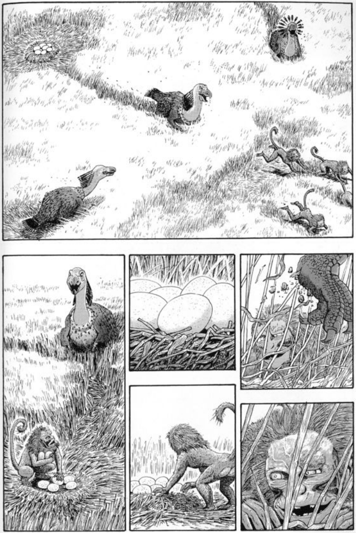
命からがら逃げる
小動物等は疾走出来る
カラキラー達にとって
恰好の餌食なのである
先程の
ラトルバックも火に強い
厚い毛の装甲は断熱効果
もあるのだ
力や知恵は無いが
守りに徹して
快適そうな暮らしぶりだ
それに比べて


バブカリはやはり逃げ惑うばかりだ
火を使いこなして進歩したという人類にはまだまだほど遠い

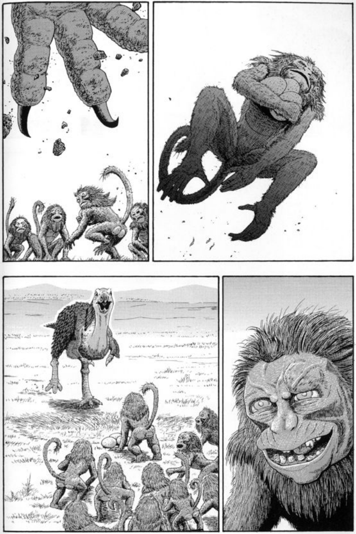

地下水の道が枯れ陥没したものだろう
炎で一掃されても瞬く間に植物は回復していく
植物もまた数々の逆境に進化を模索した賜物なのである

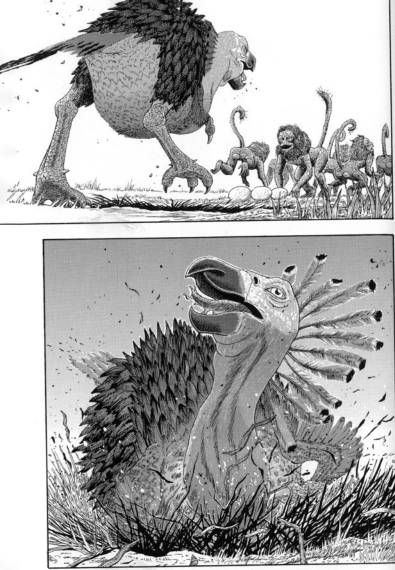


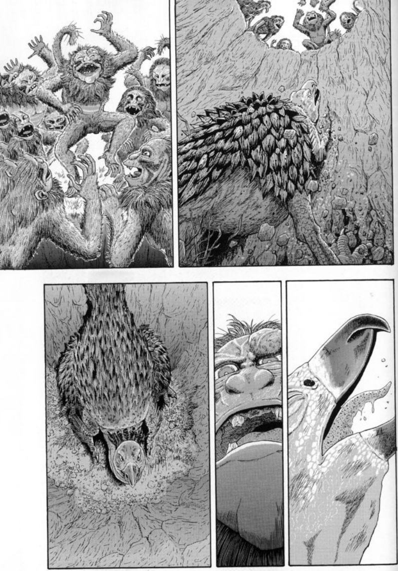


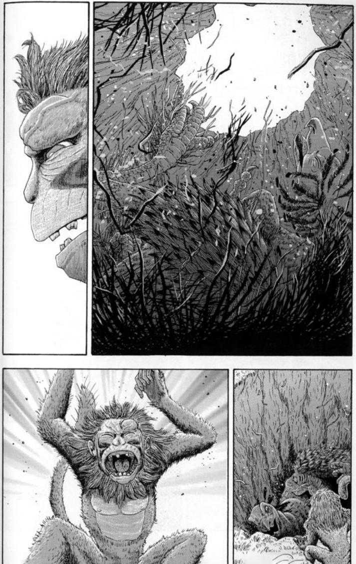


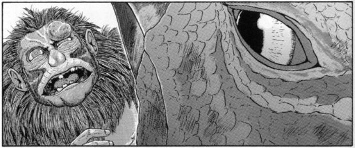
カラキラーの卵を盗むなど前代未聞の危険な行為である
それだけの理由があるのだ











良い作戦ではあったが
残念な結果である

これ以後
バブカリのボスが更に
知恵を発展させて
カラキラーと戦う事は
なかった
よほど懲りたのか
それとも頭を打った為の
一時的な気の迷いだった
のだろう

アマゾン草原　END

第二章
1億年後の世界

◆いちおくねんごのせかい◆

100 Million Years

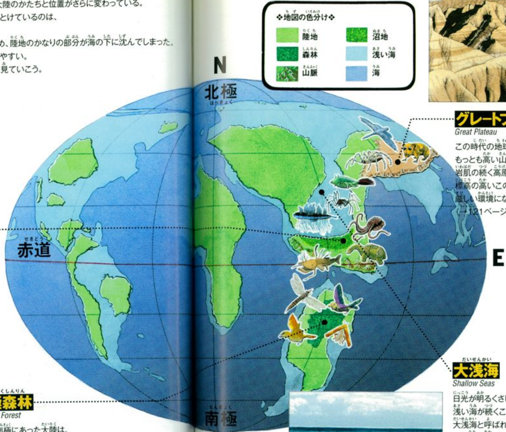
1億年後の世界 *100 Million Years*

現代から1億年後の地球は、厳しい氷河時代をくぐりぬけ、あたたかい気候につつまれている。
地球のプレートが長い時間をかけて動いていったため、大陸のかたちと位置がさらに変わっている。
かつて北と南の両方の極地をおおっていた氷がきれいにとけているのは、
人類がいたころよりも気温が高いから。
そしてとけた水が海に流れ込んで海水面が高くなったため、陸地のかなりの部分が海の下に沈んでしまった。
生きものにとっては、あたたかく湿度が高い環境は暮らしやすい。
この世界のあらゆる場所に息づく、さまざまな未来生物を見ていこう。

ベンガル沼地

Bengal Swamp

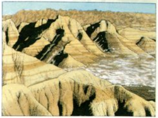
ベンガル沼地は数千キロに
わたってのびている、
沼とジャングルの蒸し暑い地帯。
積もった泥のあいだを、
にごった川が流れ、
沼の上はうっそうとした緑でおおわれている。
土に含まれる栄養分が豊かで、
植物はよく成長する。
(→67ページ、247ページ)



南極森林

Antarctic Forest

かつて南極にあった大陸は、
今や赤道近くまで移動している。
気温と湿度が上がり、
おいしげる熱帯雨林が広がっている。
(→248ページ)



グレートプラトー

Great Plateau

この時代の地球上で
もっとも高い山脈に囲まれた
岩肌の続く高原地帯。
標高の高いこの一帯は、空気がうすく
厳しい環境になっている。
(→121ページ、249ページ)

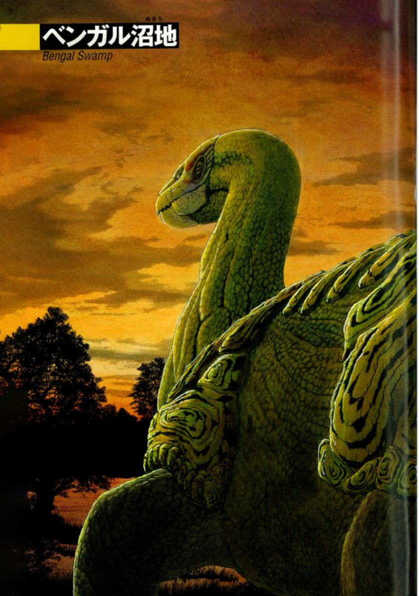
大浅海

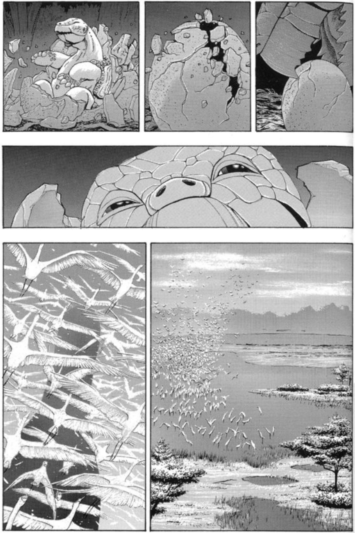
Shallow Seas

日光が明るくさしこむ
浅い海が続くこの一帯は、
大浅海と呼ばれている。
この海の中は
たくさんの生きものたちの生活の場。
1億年後の世界ではここだけではなく、
それぞれの大陸の沿岸の
ほとんどが浅い海になっているのだ。
(→95ページ、246ページ)

ベンガル沼地

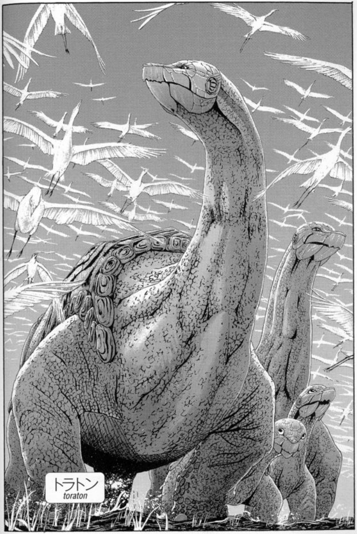
Bengal Swamp



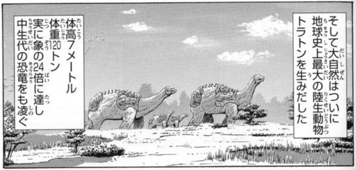


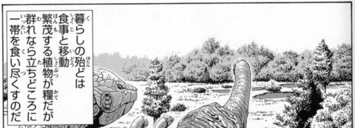
1億年後の世界

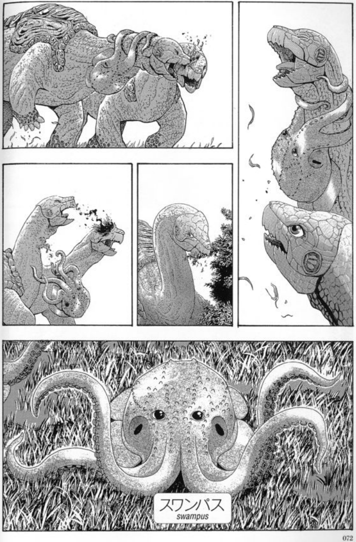
いちおくねんごのせかい

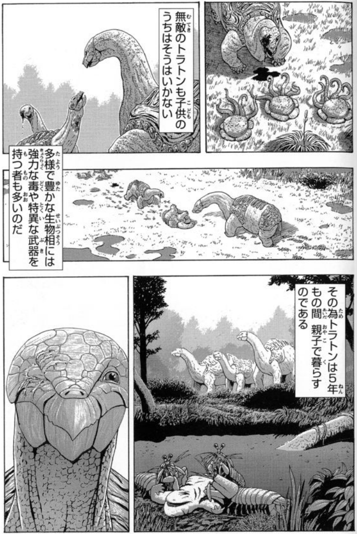

トラトン
toraton

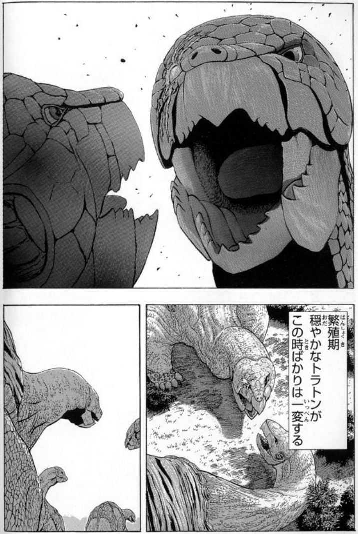
人類が消え去って一億年後
気候は極めて温暖かつ湿潤
生命の発達に最適となり
この数千キロに渡って続く
ベンガル沼地も生き物達で
溢れている


そして大自然はついに
地球史上最大の陸生動物
トラトンを生みだした
体高7メートル
体重120トン
実に象の24倍に達し
中生代の恐竜をも凌ぐ

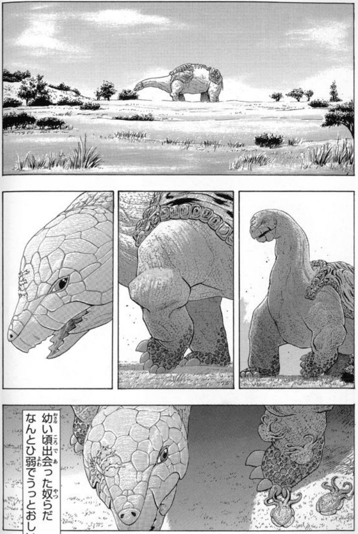

暮らしの殆どは
食事と移動
繁茂する植物が糧だが
群れなら立ちどころに
一帯を食い尽くすのだ

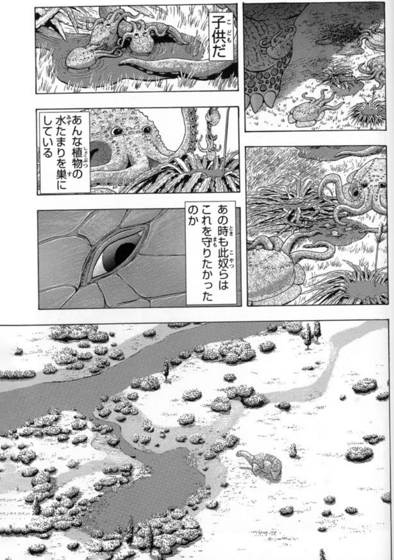

スワンパス
swampus


無敵のトラトンも子供のうちはそうはいかない
多様で豊かな生物相には強力な毒や特異な武器を持つ者も多いのだ
その為トラトンは5年もの間 親子で暮らすのである

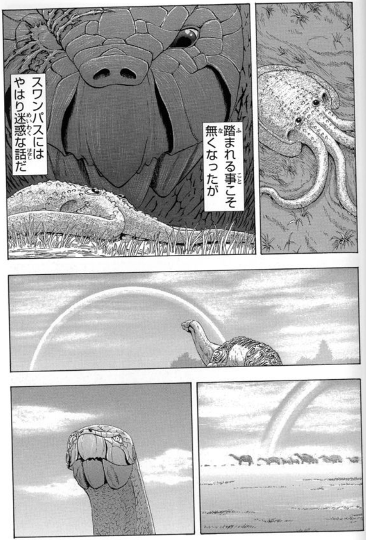

繁殖期
穏やかなトラトンが
この時ばかりは一変する

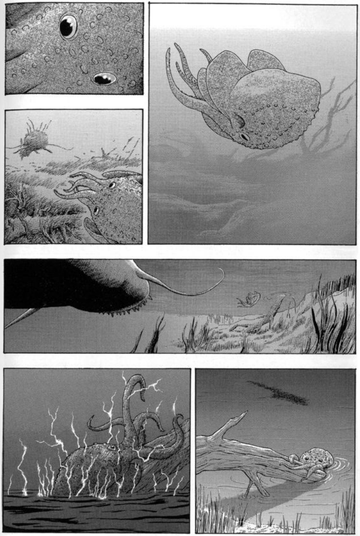
今や彼は仲間の中でも
最大の者へと成長した
トラトンの寿命はおよそ120年
若くして大きな群れを率いた
彼の覇道はまだまだ安泰の
はずだったのだが…

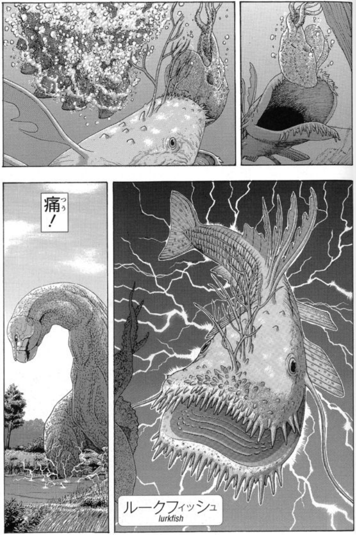

幼い頃出会った奴らだ
なんとひ弱でうっとおしい


子供だ
あんな植物の
水たまりを巣に
している
あの時も此奴らは
これを守りたかった
のか

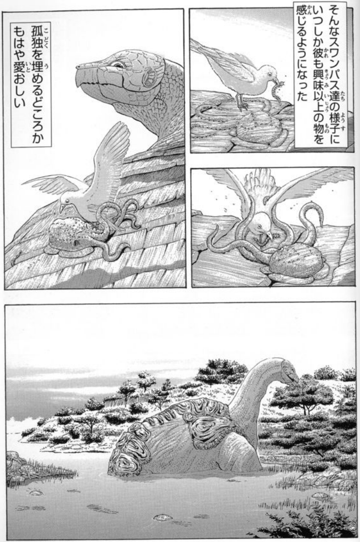
仲間の歩みに付いて行けなくなった彼であったが独りならば辺りの草木でなんとか食っていける
移動に費やしていた時間はもっぱらスワンパスへの関心に使われる事となった
しかも本当は水の中の生き物で時おり戻らないと生きていけないようだ
何匹かで見張りと餌取りを分担している
それならずっと沼にいればいいのに？ますます妙な連中だ

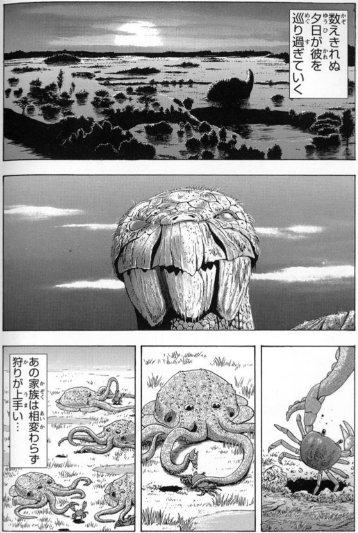

踏まれる事こそ無くなったが
スワンパスにはやはり迷惑な話だ

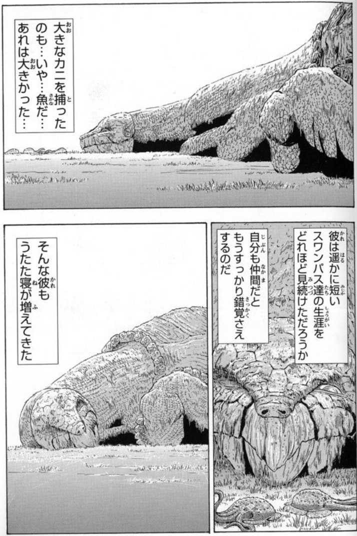


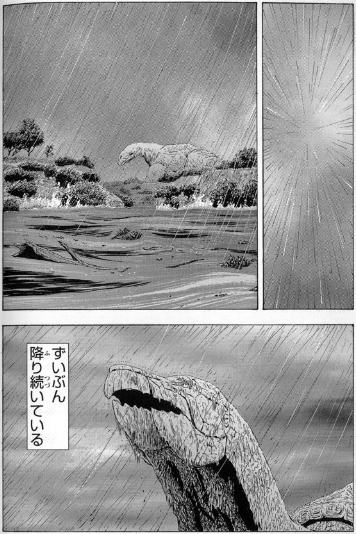

痛つう!
ルークフィッシュ
lurkfish

それは彼がただ自分の興味を
満たすだけの行動であった
スワンパス達を助けるつもり
など無かったのである
だが以来スワンパス達は
彼に親しみを覚え始めた
実はその知性は
彼よりもずっと高いのだ

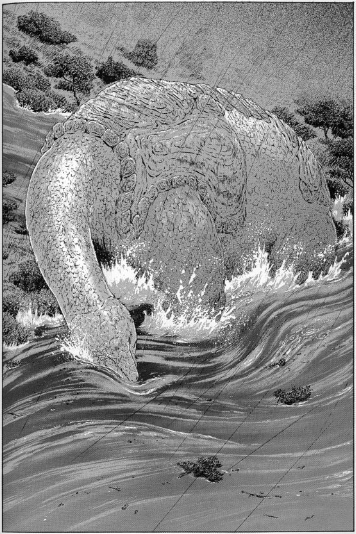

そんなスワンパス達の様子に
いつしか彼も興味以上の物を
感じるようになった
孤独を埋めるどころか
もはや愛おしい

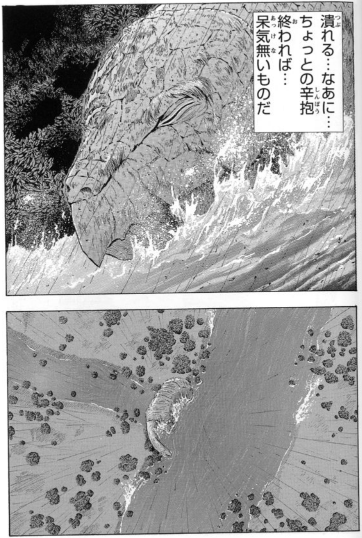

数えきれぬ
夕日が彼を
巡り過ぎていく
あの家族は相変わらず
狩りが上手い…

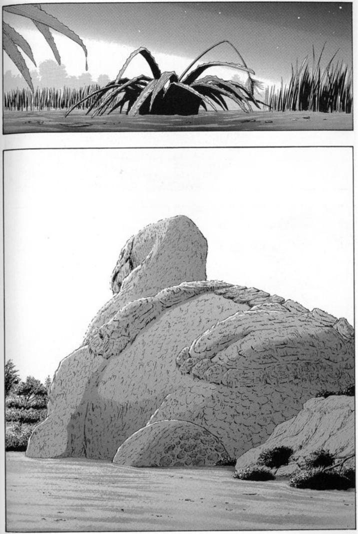

大きなカニを捕った
のも…いや…魚だ…
あれは大きかった…
彼は遥かに短い
スワンパス達の生涯を
どれほど見続けただろうか
自分も仲間だと
もうすっかり錯覚さえ
するのだ
そんな彼も
うたた寝が増えてきた

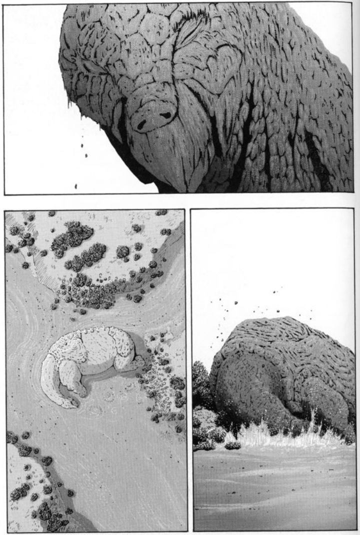

ずいぶん
降り続いている

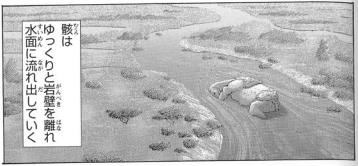
大量に流れ込んで
沼が溢れそうだ
一帯が水没してしまう
川を塞き止めなければ




潰れる…なあに…
ちょっとの辛抱
終われば…
呆気無いものだ






骸は
ゆっくりと岩壁を離れ
水面に流れ出していく

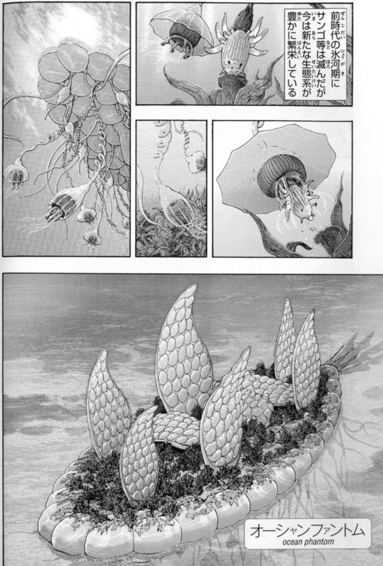
そして
その巨族の永き生涯を
大自然は静かに
包み込んでいった

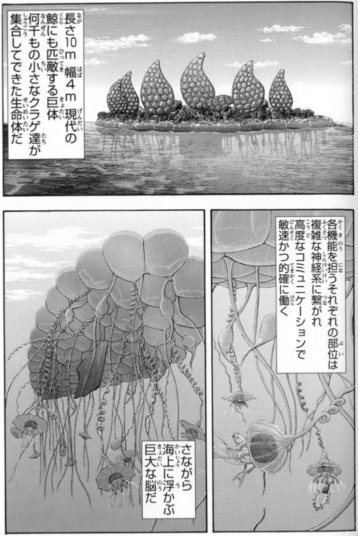
ベンガル沼地 END

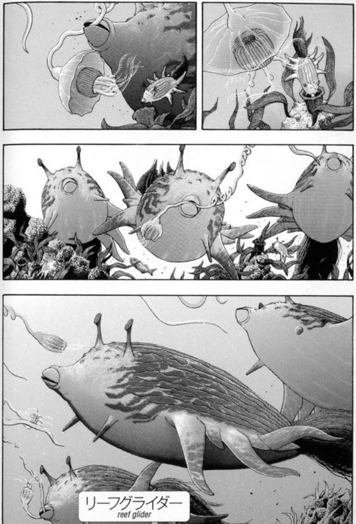
the FUTURE is WILD

1億年後の世界

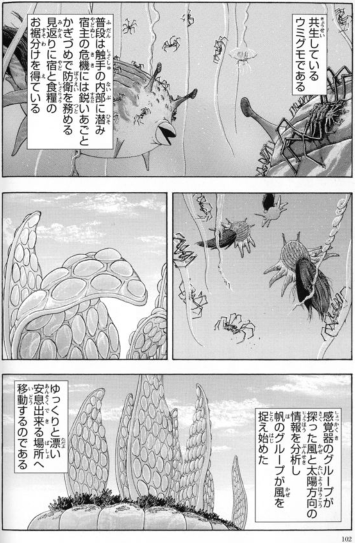
いちおくねんごのせかい

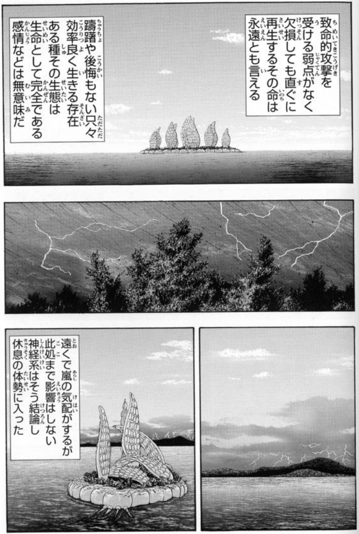

前時代の氷河期に
サンゴ等は滅んだが
今は新たな生態系が
豊かに繁栄している
オーシャンファントム
ocean phantom


長さ10m 幅4m 現代の
鯨にも匹敵する巨体
何千もの小さなクラゲ達が
集合してできた生命体だ
各機能を担うそれぞれの部位は
複雑な神経系に繋がれ
高度なコミュニケーションで
敏速かつ的確に働く
さながら
海上に浮かぶ
巨大な脳だ

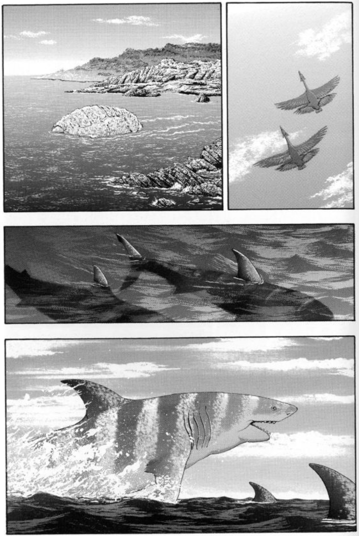

リーフグライダー
reef glider

ウミウシの子孫である
も彼らは この時代のリーフに
もっとも広く繁殖している
生き物のひとつだ
リーフグライダーの子はファントムの恰好の餌だが 触手に免疫をもつ成体は逆に天敵となる
しかし備えはある
神経系は次の指令を下した
スピンドルトルーパー
spindletrooper


共生している
ウミグモである
普段は触手の内部に潜み
宿主の危機には鋭いあごと
かぎづめで防衛を務める
見返りに宿と食糧の
お裾分けを得ている
感覚器のグループが
探った風と太陽方向の
情報を分析し
帆のグループが風を
捉え始めた
ゆっくりと漂い
安息出来る場所へ
移動するのである

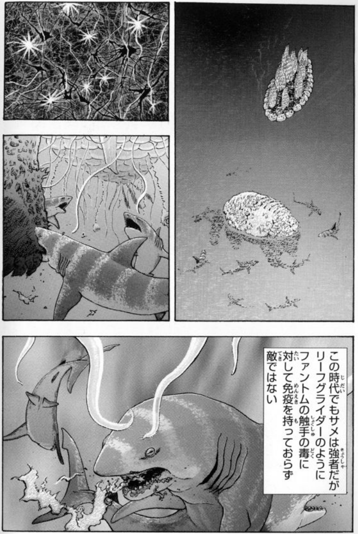

致命的攻撃を
受ける弱点がなく
欠損しても直ぐに
再生するその命は
永遠とも言える
躊躇や後悔もない只々
効率良く生きる存在
ある種その生態は
生命として完全である
感情などは無意味だ
遠くで嵐の気配がするが
此処まで影響はしない
神経系はそう結論し
休息の体勢に入った

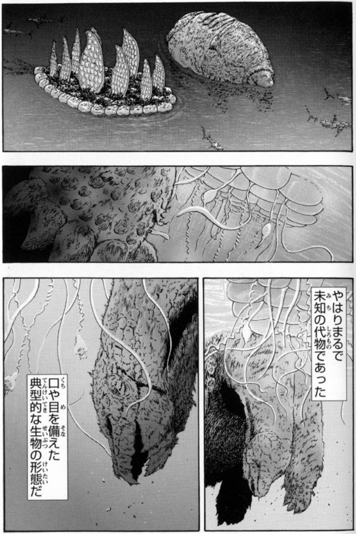
食事の栄養が全身に
行き渡った充足と
傷ついた僅かな痛みが
体を静かに覆っている
苦しみと心地よさの
混ざった感覚の最中
神経系はふと何かに
反応した
以前に経験した感覚の
ようだが明確ではない
だが幾ら精査
しても情報は
見あたらない
更に全神経を
活動させる
しかし答えは
得られなかった



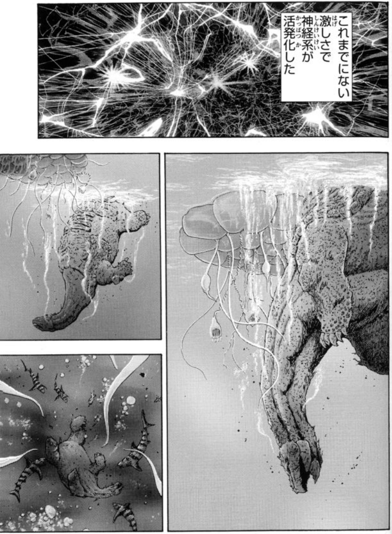
微細な感覚であったが
ファントムは今のが
サメの群れであり
何かに向かっている
のを察知したようだ
群れを追い始めた
というよりその目標で
あろう妙な未知の匂いに
惹かれ移動を開始した

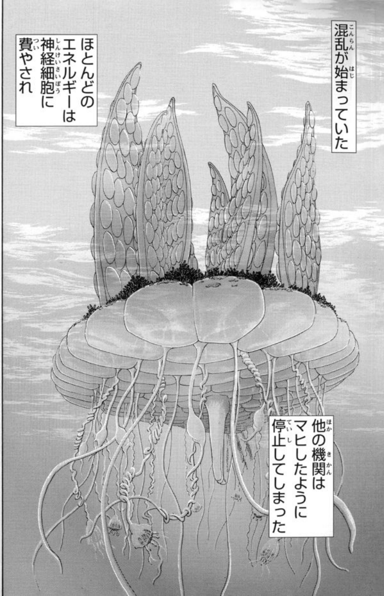
千切られた触手は
再生したが
神経系は激しく
先程の何かを求めていた
通常なら危険回避が生存に
欠かせぬ最優先事項なのだが
目下はその未知の感覚を
なくす事へと移行したようだ

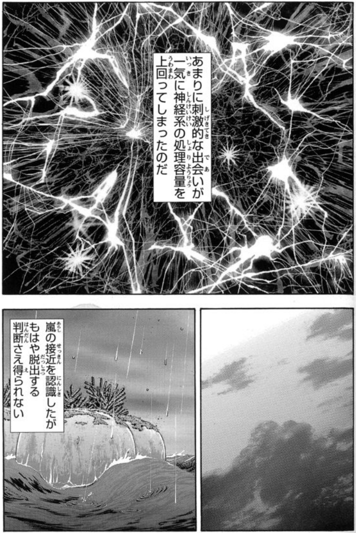

この時代でもサメは強者だが
リーフグライダーのように
ファントムの触手の毒に
対して免疫を持っておらず
敵ではない

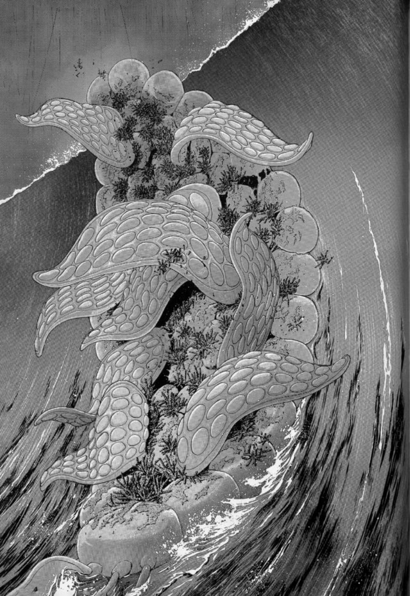

やはりまるで
未知の代物であった
口や目を備えた
典型的な生物の形態だ

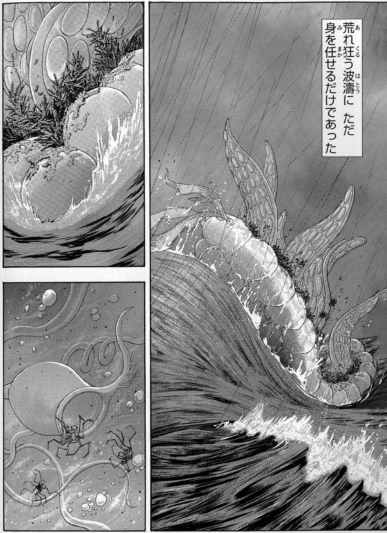
それは
この時代に生まれた
史上最大の陸生動物
トラトンの亡骸であった
もちろんファントムの
理解を超える事実だが
優秀な神経系はなんとか
巨大な生物の死骸で
ある事を把握した

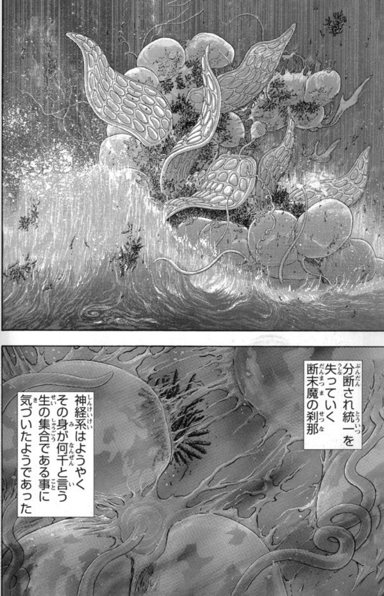

これまでにない
激しさで
神経系が
活発化した

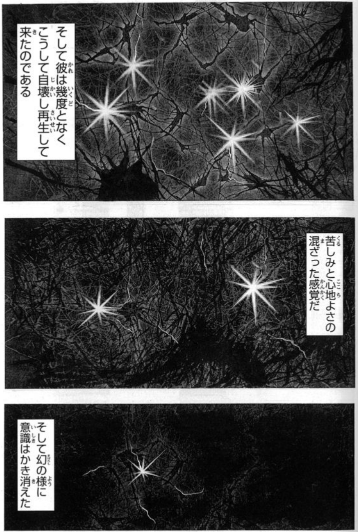

混乱が始まっていた
ほとんどのエネルギーは神経細胞に費やされ
他の機関はマヒしたように停止してしまった


あまりに刺激的な出会いが一気に神経系の処理容量を上回ってしまったのだ
嵐の接近を認識したがもはや脱出する判断さえ得られない

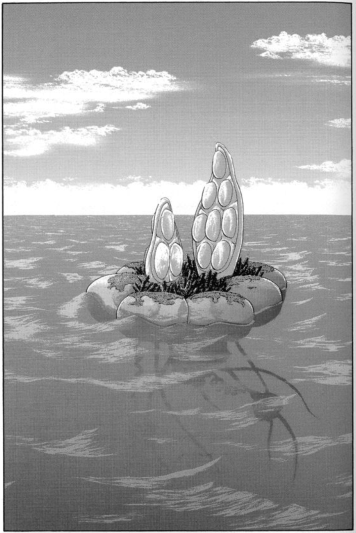



荒れ狂う波濤に ただ
身を任せるだけであった


分断され統一を失っていく断末魔の刹那
神経系はようやくその身が何千と言う生の集合である事に気づいたようであった


そして彼は幾度となくこうして自壊し再生して来たのである
苦しみと心地よさの混ざった感覚だ
そして幻の様に意識はかき消えた

もしかすると
その神経系は必要以上に
発達するのを自ら拒んで
いるのだろうか
だとすれば
彼等は本当に
完全なる生命体で
あるのかも知れない



大浅海 END

グレートプラトー
Great Plateau

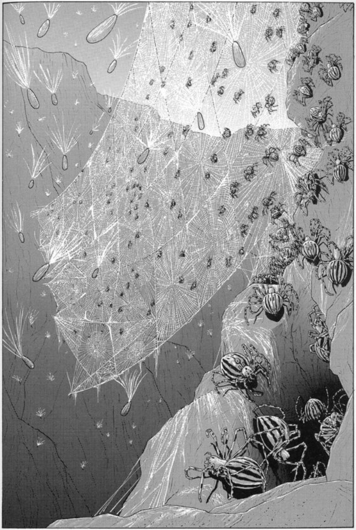
the FUTURE is WILD

1億年後の世界

❖いちおくねんごのせかい❖

隆盛を極めた
恐竜に とって
代わった哺乳類
しかし等しく
終焉は訪れる
人類が
消え去って
1億年後
その最後の
末裔は
もはや
自ら生きる
力さえ無い
グレートブルーウインドランナー
great blue windrunner

1億年後 全地球的に
極めて暖かく湿潤な
気候が永く続き
生物の優劣は大きく
入れ替わった
海抜一万メートルに及ぶ
この高原地帯だけは
かつての寒冷を保って
いるが それでも勢力図は
塗り変わっている



シルバースパイダー
silver spider
高い社会組織を得た
このクモ達は特異な
食料調達法を形成した
谷にかけた巨大な
網に捉えるのは
ほとんどが風で飛んでくる
植物の種子である
しかし 彼らは肉食であり
これを食べない

ポグル
poggle
地球上に唯一生き残る哺乳類である

その生業はクモ達に養われ必要に応じて食われる事
家畜だ
網で捉えた大量の種子は家畜を肥らせる為の飼料というわけだ

自活能力は無くとも
哺乳類の特性
好奇心はまだ持っているようだ
古い物だ
だいぶ昔に崩れ閉ざされた場所なのだろう
大発見だ
大丈夫
美味い

この時期シルバースパイダーは網の修繕や拡張に忙しくなるもうすぐ種子の飛散の盛りが始まるのだ
逸すれば大事今の蓄えなど一月分だ大食漢を飼っているのである
ボグル達はこんなリスクからも庇護されている

そろそろ帰ろう
ダメだ
…お腹が空いた

食いさえしなければ良いのだがそれを彼に望むのは酷だろう
永い怠惰と飽食で忍耐や自制などとうに失っている

もうすっかり彼は
此処での暮らしに
身をまかせていた
まずい
食べ物がもう
なくなって
しまう

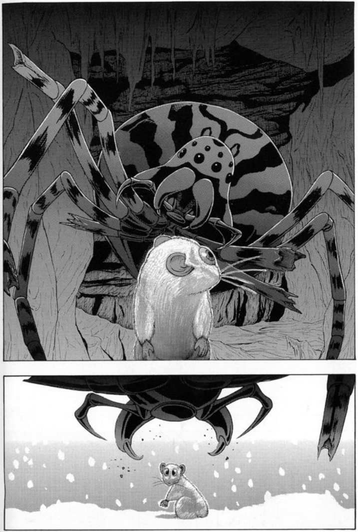
クモ達が争っていた
あんな光景は見た
ことがない

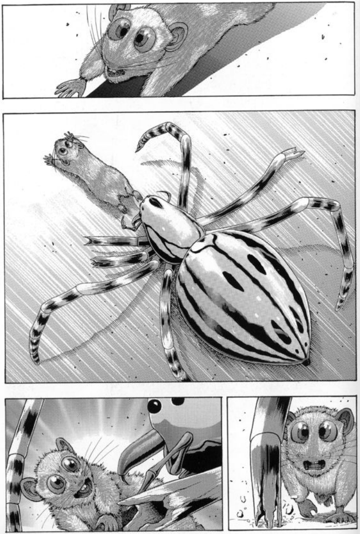
結局
彼が脱出できたのは
食べ物が尽き
痩せ細ってからだった
種子の山がない…
誰もいない
変だ…

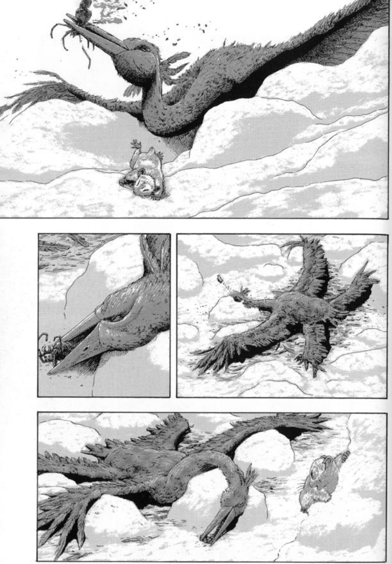
変だ！
変だ！
何があったんだ！
食べ物！
食べ物は
どこだ!!

種子だ!
冷たい!

ひとつの時代が終焉を迎えるのだ
彼には思いも寄らない
マントル層の活性化が環境を
激変させているのである
噴煙が黒雲となって空を覆い
太陽光の消失によって気温が
世界規模で急激に下がる
植物は枯れ　種子が無ければポグルも
育たない　あげくにシルバースパイダー
たちは共食いにまで追い込まれたのだ







グレートプラトー END

第三章
2億年後の世界
◆におくねんごのせかい◆

200 Million Years

the FUTURE is WILD

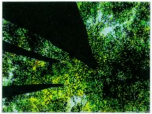
2億年後の世界 *200 Million Years*

地球上のすべての大陸が互いに近づきぶつかりあった結果、2億年後の世界には、
ひとつのものすごく大きな大陸が出現している。
それが「第二パンゲア」という名前の超大陸。
大陸がひとつになれば、当然、それをとりまく海もひとつ。
第二パンゲアのまわりには、見わたすかぎりの大きな海——地球海が広がっている。
豊かな森林地帯、乾ききった大砂漠、どこまでも広い海……。
この時代にもそれぞれの場所で暮らす、奇妙な未来生物がいる。
2億年後には、とほうもない世界が待ち受けているのだ。

北部森林

Northern Forest

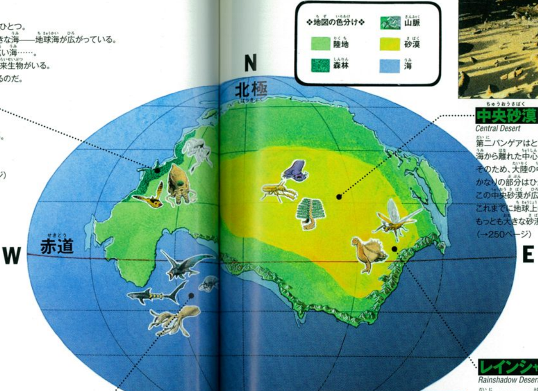
第二パンゲアの北西の海岸には、雨が絶えず降る。
水分の多い肥えた土地が続く一帯には、
活気あふれる森が生まれている。
ここは生命の宝庫だ。(→210ページ、253ページ)



地球海

Global Ocean

地球海は、はてしなく大きな海だ。地球海全体を流れる大きな海流に乗って、この海に住む生きものたちは
いろいろな場所へ移動することができる。
(→151ページ、251ページ)



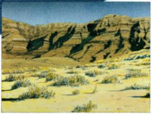
中央砂漠

Central Desert

第二パンゲアはとても広いので、
海から離れた中心部には雨が降らない。
そのため、大陸の中心部の
かなりの部分はひからびてしまい、
この中央砂漠が広がっている。
これまでに地球上にできたもののうちで、
もっとも大きな砂漠だ。
(→250ページ)

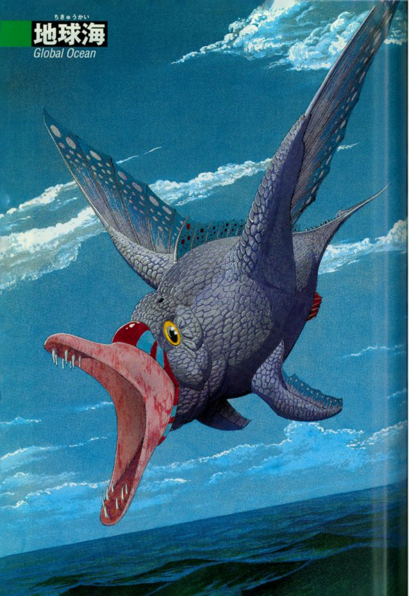
レインシャドー砂漠

Rainshadow Desert



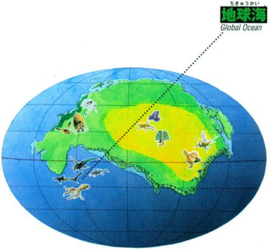
第二パンゲアの南の海岸地帯には、
海岸に沿うように山脈がそびえている。
海ではしばしば嵐が発生するが、
高い山脈がかべとなって
陸地にはまったく影響がない。
そのせいで山脈の内陸側は雨も降らず、
レインシャドー砂漠という
荒れ地になっている。
(→183ページ、252ページ)

地球海（ちきゅうかい）
Global Ocean



人類が地球上から
姿を消して…
2億年後
生命は驚異的な
進化を遂げた
海洋を悠々と泳ぐ
この生物は魚ではない
シルバースイマー
silverswimmer

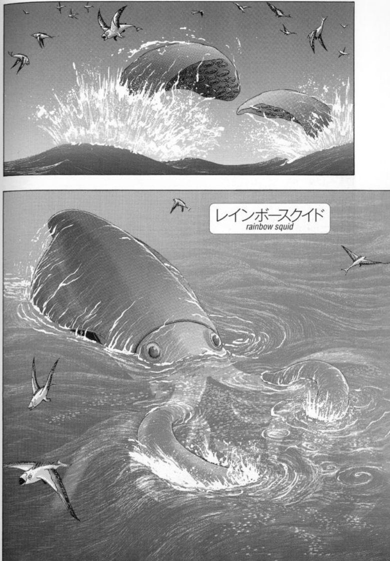
オーシャンフリッシュ
ocean flish
空を奔放自在に飛ぶ
彼らこそが
かつて魚であった者の
子孫なのである



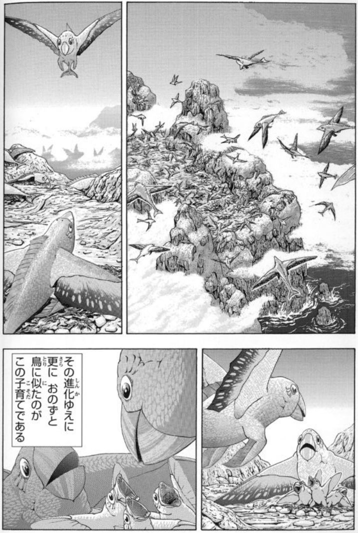
2億年後の世界
✤におくねんごのせかい✤

いち早く進化し
爆発的に勢力を
伸ばしたのは
シルバースイマーの祖先
エビやカニの仲間
(甲殻類)であった…
魚たちは
環境を奪われ
逃げ惑い…

海を捨てた
もはや彼らが
海中を泳ぐ事は無い
胸ビレを翼へと
完全に進化させ
うきぶくろは肺と
なった

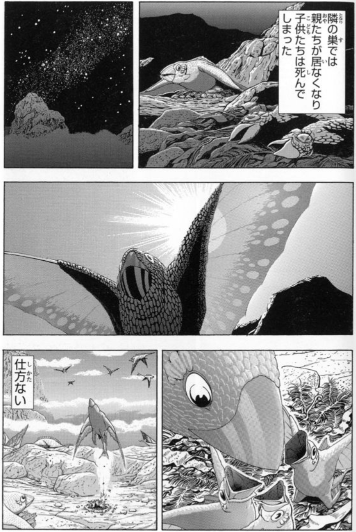

レインボースクイド
rainbow squid

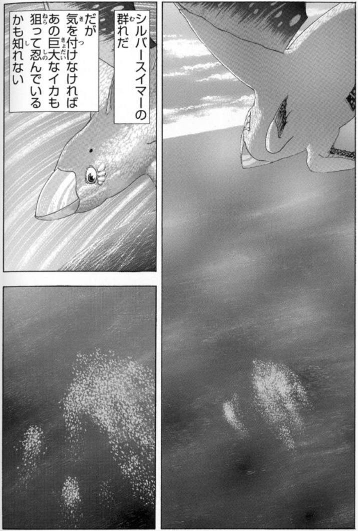
巻き添えを食う所だった
あの怪物は狩りの時巧みに体の色を変えて近づき 見事に海に溶け込むのだ
飛ぶ事を覚えた時鳥類はすでに消え去っており彼らは なんなく天空の支配者になったのである

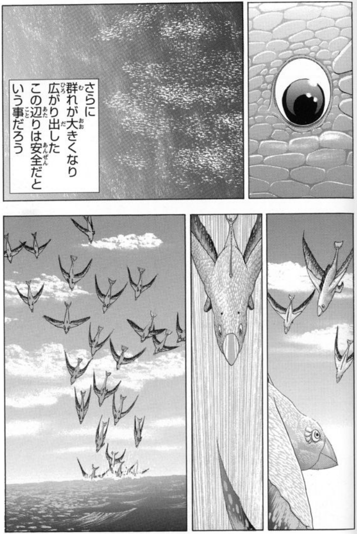

その進化ゆえに
更に おのずと
鳥に似たのが
この子育てである

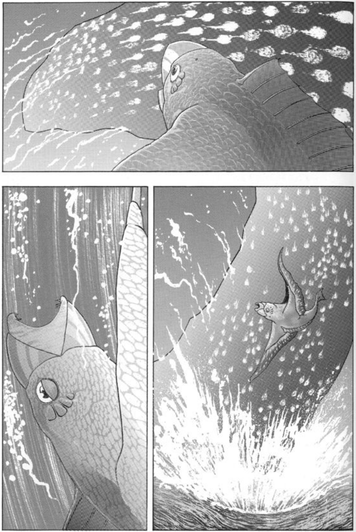
子供たちが「飛ぶ」
という特殊な業を
体得するまで
面倒を見なければ
ならなくなったのだ
この種は つがいで
巣の見張りと
餌捕りを
交代でしている

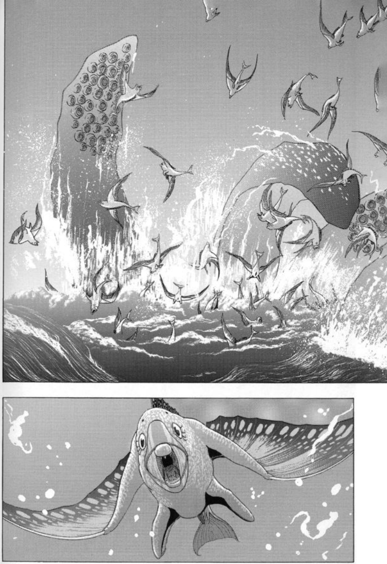
おかしい
母親が帰って
来ない…
そう言えば
近頃 仲間たちの
姿が少し減った
様な気がする

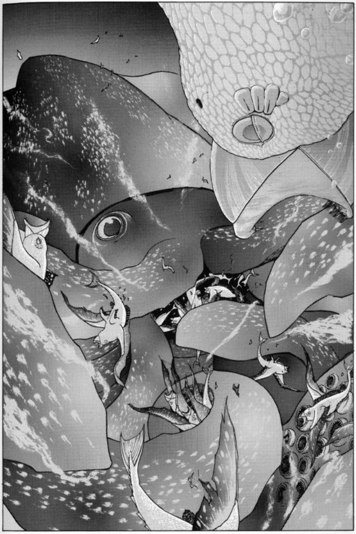

隣の巣では
親たちが居なくなり
子供たちは死んで
しまった
仕方ない


シルバースイマーの
群れだ
だが
気を付けなければ
あの巨大なイカも
狙って忍んでいる
かも知れない


さらに
群れが大きくなり
広がり出した
この辺りは安全だと
いう事だろう

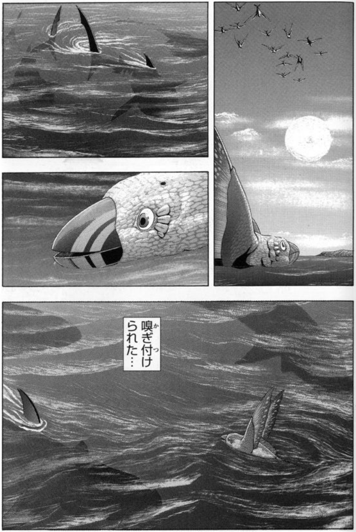


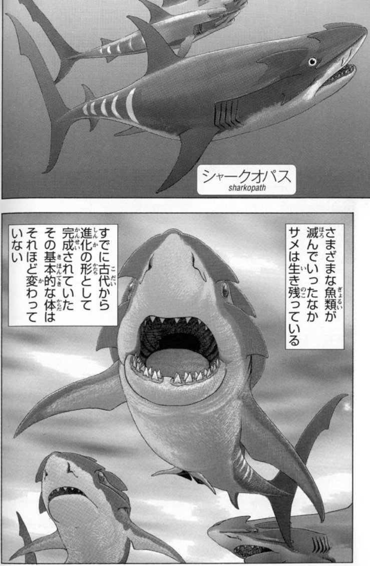


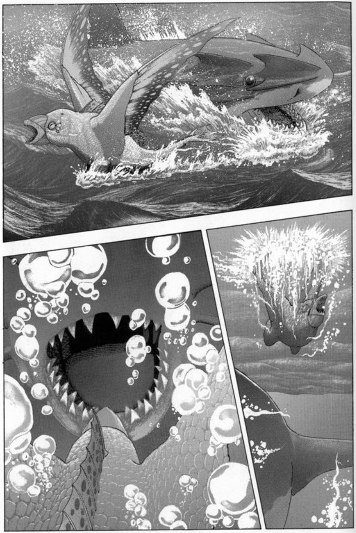


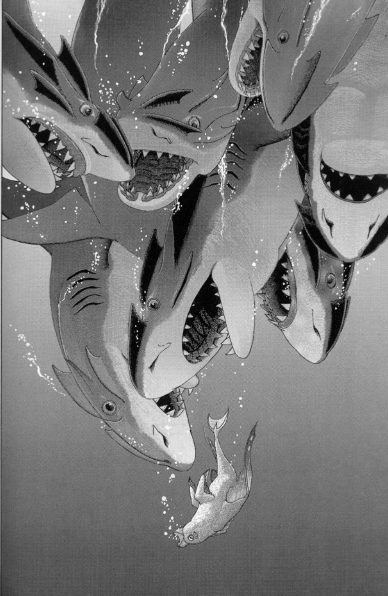
騙された！
此奴はシルバースイマーの群れの像さえ作れるのか！
なんて狡猾な奴だ
戻って来なかった仲間たちも此奴の餌食になったに違いない

なんとか助かったが翼を痛めてしまった
ダメだ
尾ビレがしびれて飛び上がれない
…帰らなければならないのに…
風だ！


嗅ぎ付けられた…

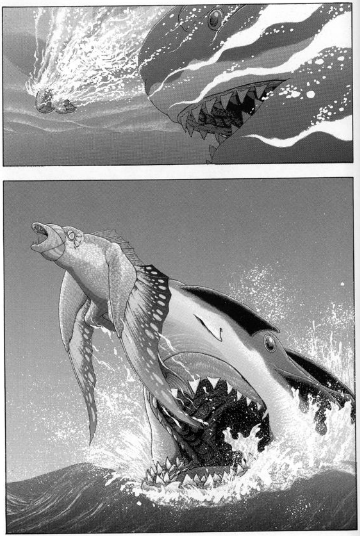

シャークオパス
sharkopath
さまざまな魚類が滅んでいったなかサメは生き残っている
すでに古代から進化の形として完成されていたその基本的な体はそれほど変わっていない

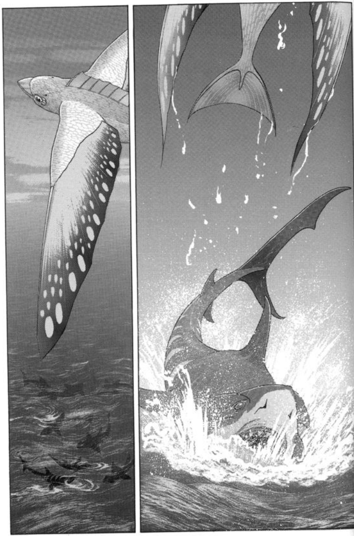


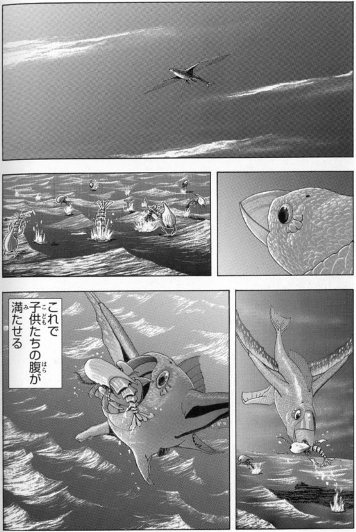


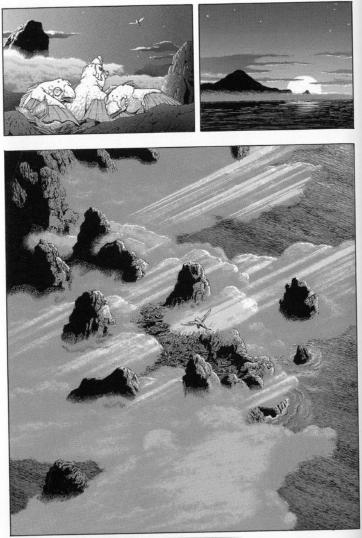
なんだこの感じは
…まるで水中を
飛んでるような…
極限が彼の体の
どこかに残されていた
遠い記憶をわずかに
蘇えらせたのだ
彼はかすかな
その感覚に
従った

出来るかも知れない！
自分はこんな所で
食われてしまう訳には
いかないのだ！





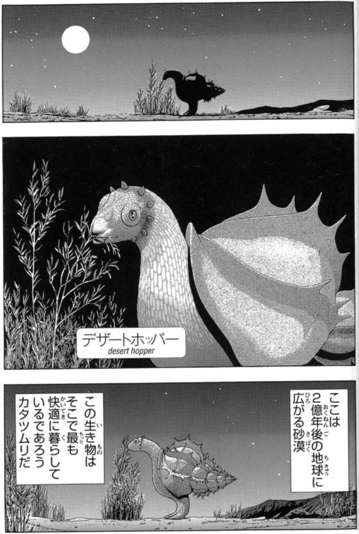


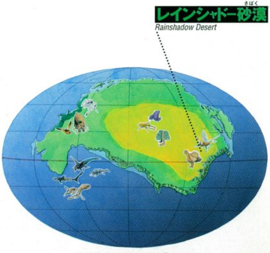


地球海 END

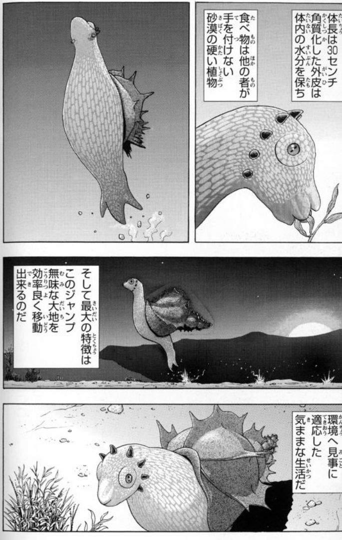
レインシャドー砂漠（さばく）
Rainshadow Desert

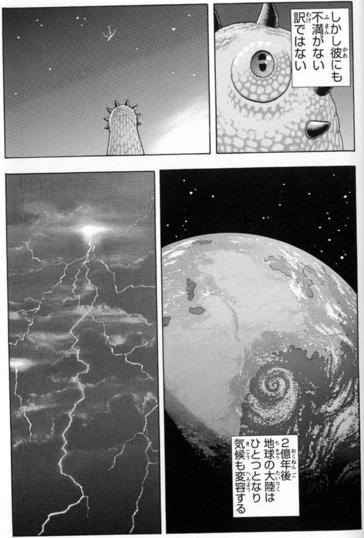
the FUTURE is WILD


デザートホッパー
desert hopper
ここは2億年後の地球に広がる砂漠
この生き物はそこで最も快適に暮らしているであろうカタツムリだ

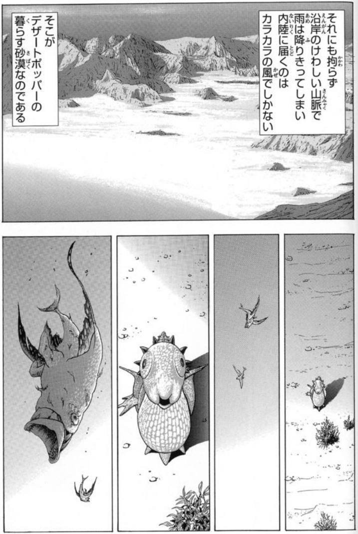

レインシャドー砂漠
Rainshadow Desert

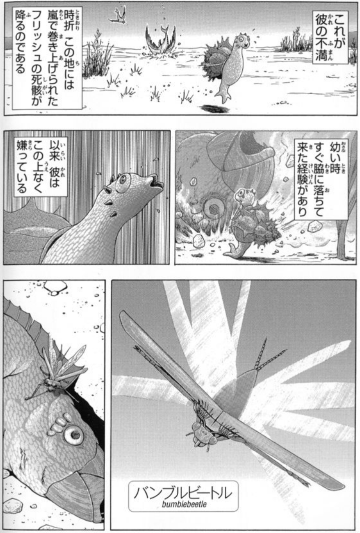
2億年後の世界


体長は30センチ
角質化した外皮は
体内の水分を保ち
食べ物は他の者が
手を付けない
砂漠の硬い植物
そして最大の特徴は
このジャンプ
無味な大地を
効率良く移動
出来るのだ
環境へ見事に
適応した
気ままな生活だ

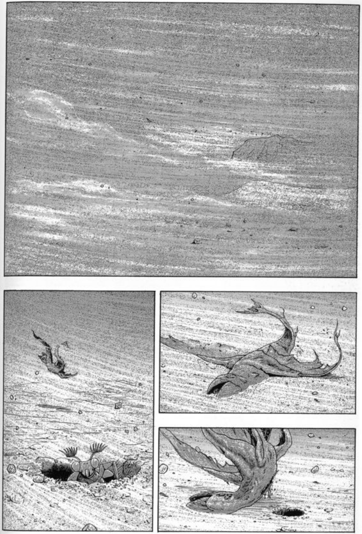

しかし彼にも
不満がない
訳ではない
2億年後
地球の大陸は
ひとつとなり
気候も変容する

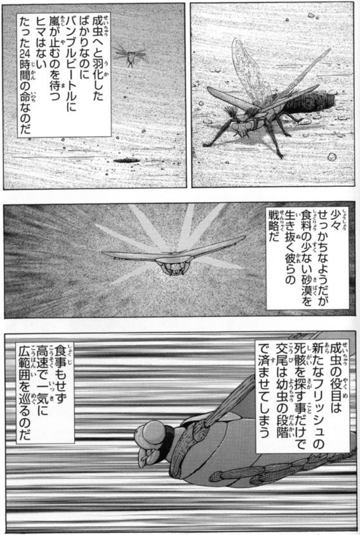
大陸東岸で度々
発生する嵐は
風速100メートルに
達する超大型だ
遭遇した生物は
ことごとく巻き込まれ
中でも被害が甚大なのは
空で暮らす進化をした
魚の子孫
フリッシュたちだ


それにも拘らず
沿岸のけわしい山脈で
雨は降りきってしまい
内陸に届くのは
カラカラの風でしかない
そこが
デザートポッパーの
暮らす砂漠なのである


これが
彼の不満
時折 この地には
嵐で巻き上げられた
フリッシュの死骸が
降るのである
幼い時
すぐ脇に落ちて
来た経験があり
以来 彼は
この上なく
嫌っている
バンブルビートル
bumblebeetle

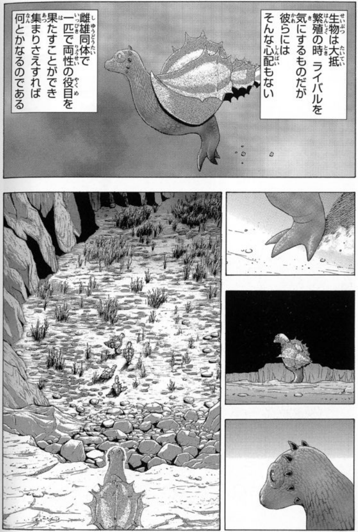
すぐさま飛んで来た
この昆虫などは
フリッシュの死骸だけを
あてに生きている
すでに腹に宿して
いた幼虫たちの
住処となるのだ
他にも多くの者が
栄養にしており
この現象でこの地は
支えられていると
言ってもいい
けれども彼には
うっとおしい物
でしかない

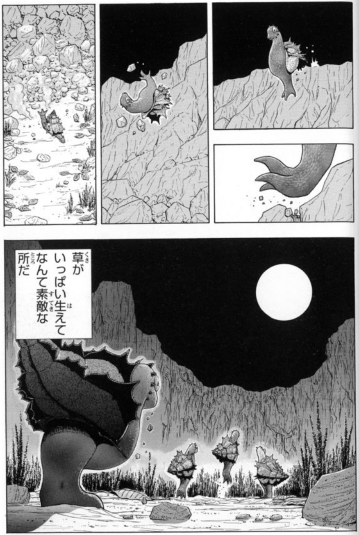



成虫へと羽化した
ばかりなのに
バンブルビートルに
嵐が止むのを待つ
ヒマはない
たった24時間の命なのだ
少々
せっかちなようだが
食料の少ない砂漠を
生き抜く彼らの
戦略だ
成虫の役目は
新たなフリッシュの
死骸を探す事だけで
交尾は幼虫の段階
で済ませてしまう
食事もせず
高速で一気に
広範囲を巡るのだ

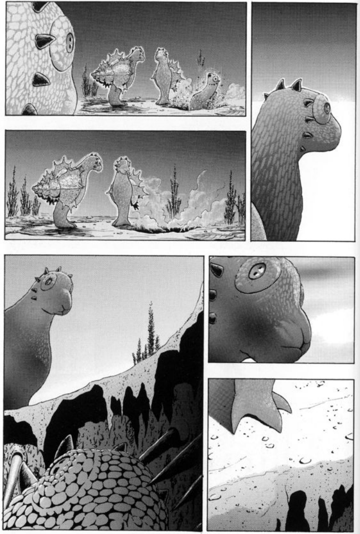
いくら捜してもフリッシュが見つからない
それもそのはずここしばらくフリッシュの死骸は降っていないのだ
既に多くの生き物たちが食料不足に苦しみ
このバンブルビートルも限界・エネルギー切れが迫っていた
だがそんな砂漠の大事件に無頓着な者もいる

彼だ
よく見れば草の育ちがいつもよりも悪いはずなのだが気づいてなどいない
繁殖期に入り神経はそっちに向かっている
いた


生物は大抵
繁殖の時 ライバルを
気にするものだが
彼らには
そんな心配もない
雌雄同体で
一匹で両性の役目を
果たすことができ
集まりさえすれば
何とかなるのである


草が
いっぱい生えて
なんて素敵な
所だ

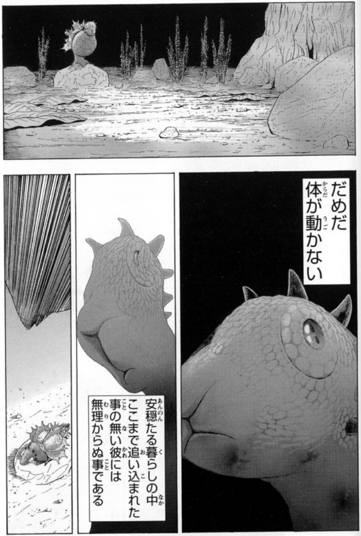
消えた

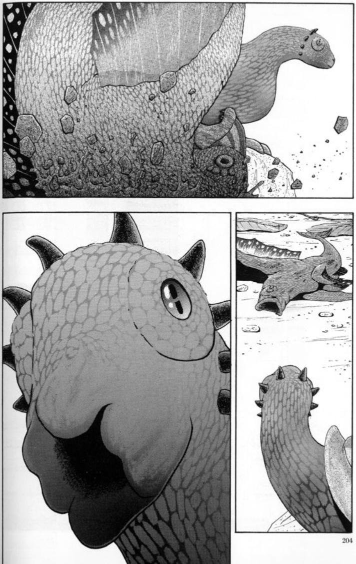


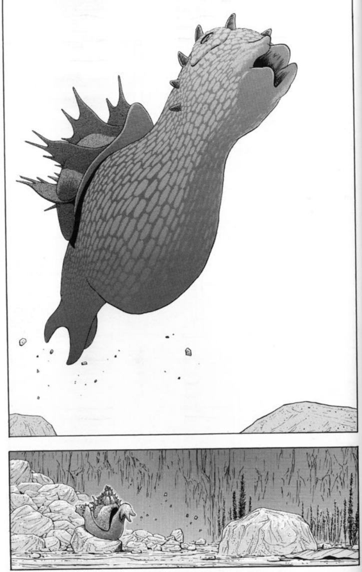
ようやく彼にも
事態が飲み込めた
ここの植物は
落とし穴で獲物を
捕らえる肉食性植物
デスボトルプラント
なのだ
谷をすべって来た
生物たちを
食らううちに群生し
さらに草食動物を誘う
巨大なワナを形成
したのである

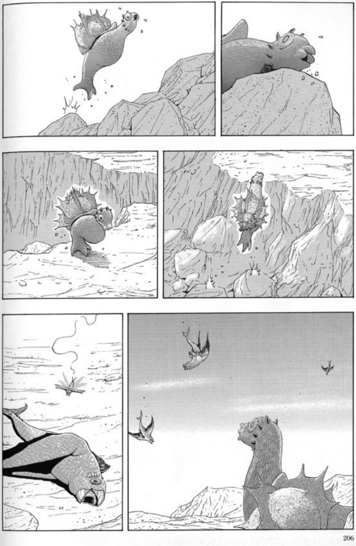
とてもじゃないが
出口まで辿り着け
そうにない
落とし穴
だらけだ

石の上なら
ワナはない
単純だがなかなか
素晴らしい発想だ
しかし…
途切れている
……あと少し
なのに…
イチかバチか
ここは下へ降り
なければ……


だめだ
体が動かない
安穏たる暮らしの中
ここまで追い込まれた
事の無い彼には
無理からぬ事である







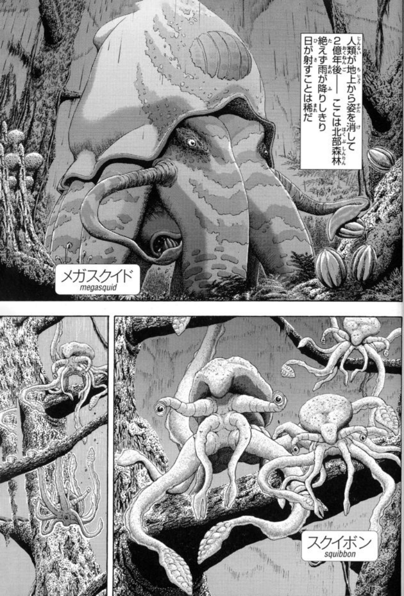
レインシャドー砂漠 END

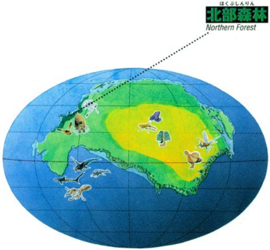
theFUTUREisWILD™

ほくぶしんりん

北部森林

Northern Forest



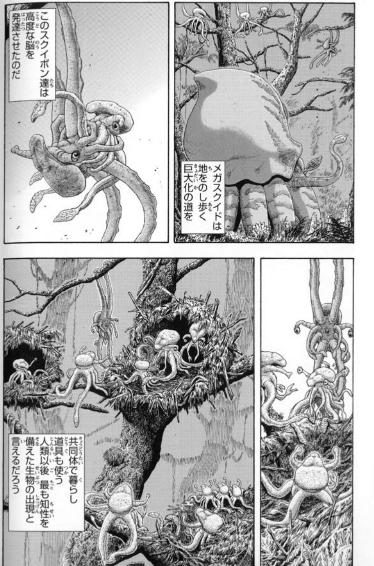


2億年後の世界

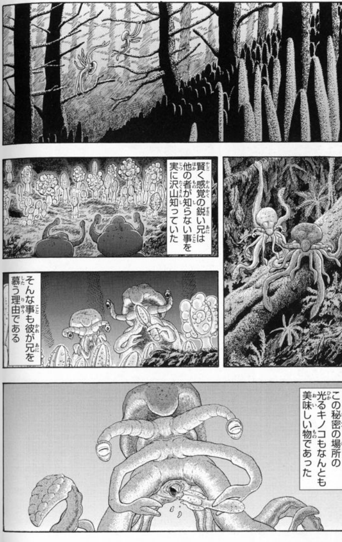
におくねんごのせかい

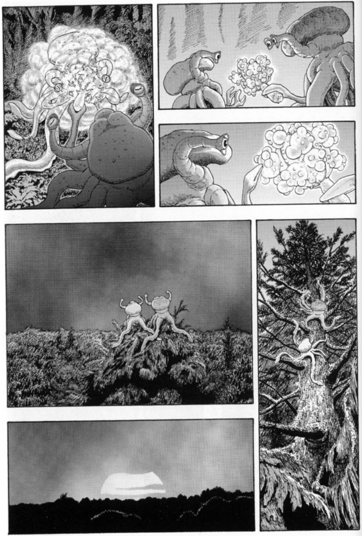
彼等の祖先はどちらもイカだ

陸生の脊椎動物を悉く絶やした一億年前の大量絶滅
その大いなる生態系の空白が彼等へ上陸する充分な時間を与えたのである


メガスクイドは
地をのし歩く
巨大化の道を
このスクイボン達は
高度な脳を
発達させたのだ
共同体で暮らし
道具も使う
人類以後 最も知性を
備えた生物の出現と
言えるだろう

フォレストフリッシュ
forest flish
枝渡りの学習を
兼ねた遊びだ
彼等は
歳の離れた兄弟である
子供の世話は普通
分担するのだが
この子は助けられて以来
えらく兄に懐くようになり
もっぱら一緒に居ることが
多くなっていた


賢く感覚の鋭い兄は
他の者が知らない事を
実に沢山知っていた
そんな事も彼が兄を
慕う理由である
この秘密の場所の
光るキノコもなんとも
美味しい物であった



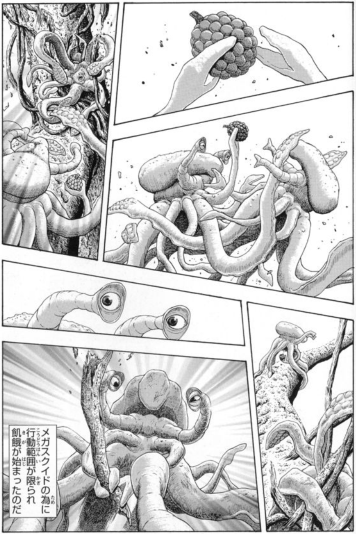
滅多に見られない満天の星
気象を正確に感じての行動だが 弟にとってはまるで兄が不思議な力を持っているかの様であった

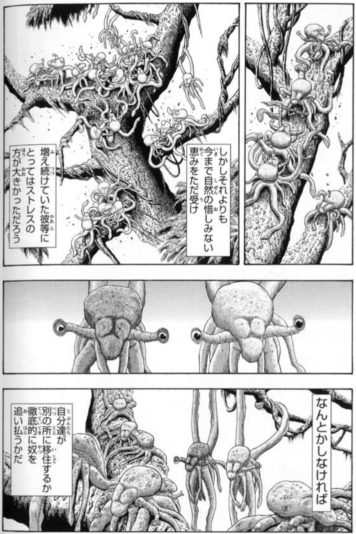
時が経ち 今やあの弟が共同体のリーダーに収まっていた
争ってではなく仲間達は自然と 立派な体格と豊かな知性を供えた彼を選んだのである
もちろん そんな彼が育ったのは兄あればこそであった
ちなみに 美味しい例のキノコはもう皆の財産になっている

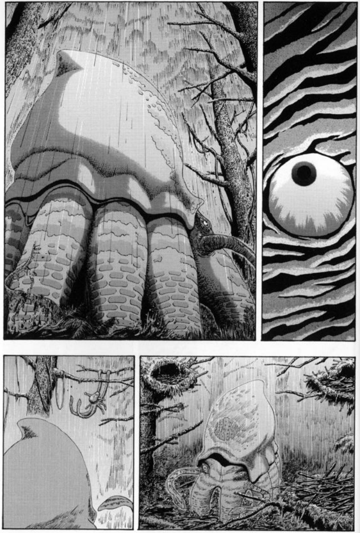
かといってリーダーの
仕事はさほど無い
キノコなどものの一日で
生える豊かなこの地では
もめ事や障害など
皆無に等しいのである
しかし安穏たる
永き暮らしに危険が
迫っていた

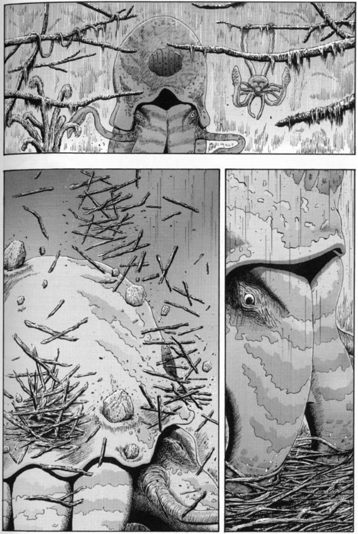
たとえメガスクイドが
近くに居ようと
木の上の方にいれば
絶対に安全であったのに
奴は獲物を振り落とす
技を心得ていたのだ

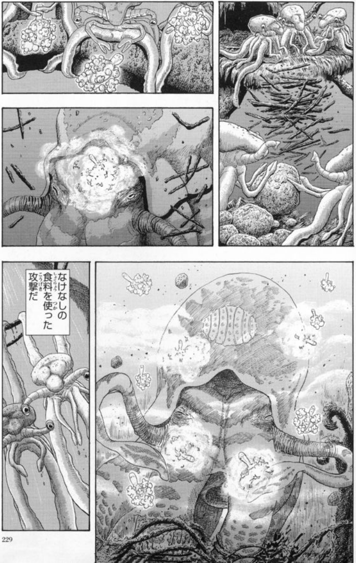
本来そんなに知能は高くないメガスクイドだがおそらく何かの偶然でその妙な知恵を得たのだろう
追い払う努力は行われた
だが暫くすると奴は戻って来るのである

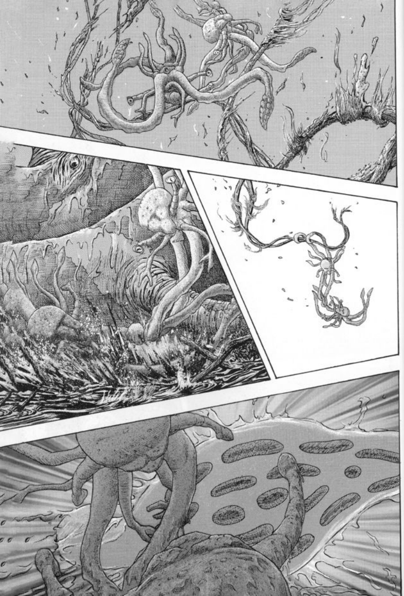

メガスクイドの為に行動範囲が限られ飢餓が始まったのだ

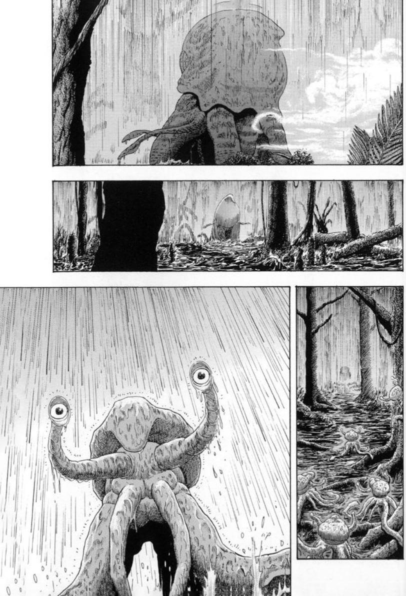
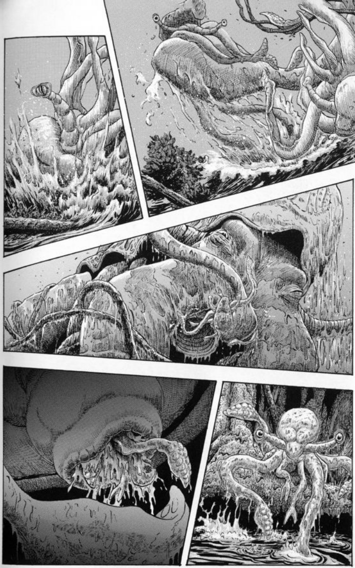

しかしそれよりも
今まで自然の惜しみない
恵みをただ受け
増え続けていた彼等に
とってはストレスの
方が大きかっただろう
なんとかしなければ
自分達が
別の所に移住するか
徹底的に奴を
追い払うかだ



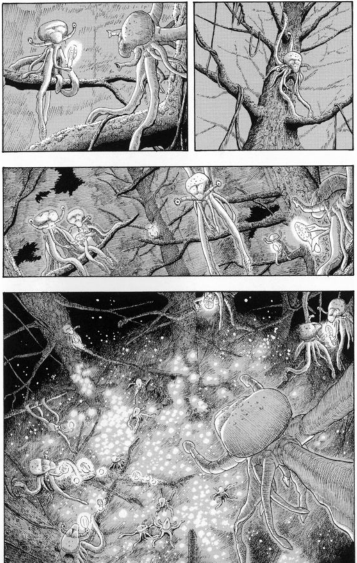


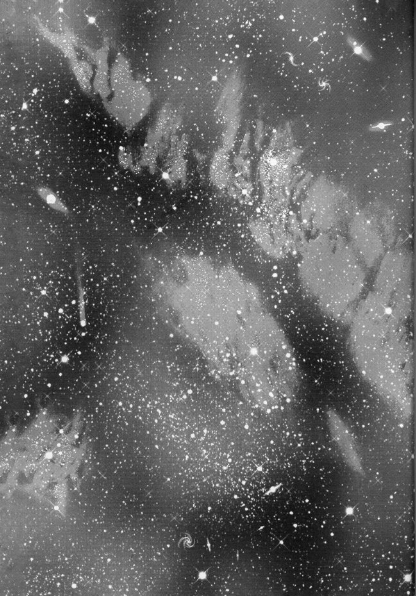

なけなしの
食料を使った
攻撃だ

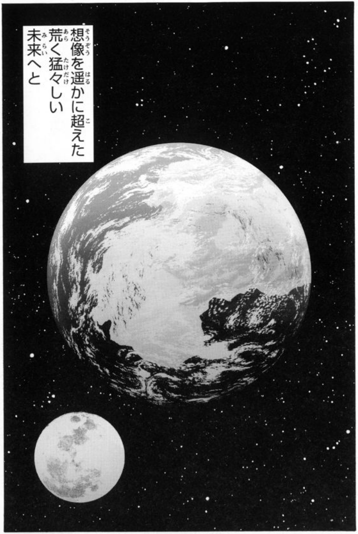


彼は一昼夜ここに佇んだ
しかし雲が晴れ星が覗く事はなかったのである
当たり前だ星空は兄だけの不思議な力なのだ



果たしてこれから
彼等はどんな進化を
するのだろう
少なくとも人類より
暗澹たる知性では
ないようである


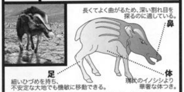


北部森林 END

フューチャー・イズ・ワイルド 未来生物図鑑

the FUTURE is WILD

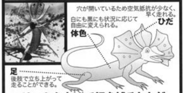
No.05 スクローファ
scrofa



長い鼻で食べものを漁るイノシシ

石灰岩が石畳状に広がるカルスト大地に暮らす、現代のイノシシの子孫。雑食性で環境の変化に強かったため、イノシシは大量絶滅をうまく生き延びることができたのである。岩場を無数に走る深い空隙を長い鼻で探り、植物、腐肉、小動物、卵などを食べる。家族で群れを作るが、雄は成長すると群れを離れるため、群れには雄は子どもしかいない。家族を率いるのは2頭の雌。えさの多い晩春、雌は一回で3〜6匹の子を出産するが、猛禽類やイタチ科の肉食獣に狙われやすく、えさを探すときには2、3匹の大人が見張り役に立つ。

No.04 クリプタイル
cryptile



エリマキを広げて餌を捕るトカゲ

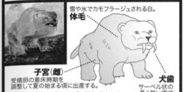
地中海盆地に広がる塩の平原に住むトカゲ。現代のエリマキトカゲのようなひだを首の回りに持つが、威嚇のためだけでなく、獲物をとらえるために利用している。粘液の分泌でねばねばしているひだを広げて、ミギワバエが群れて飛んでいるところを走りぬけると、ひだにハエがくっつく。そのハエを食べる。あたりの水は塩分濃度が高すぎるため飲むことはなく、食べたハエから必要な水分のすべてを得る。体色は周囲の環境に合わせて変えることができる。雄はフリルの色が鮮やかで、その派手さで雌にアピールする。

No.06 グライケン
gryken

岩の裂け目をすばやく走る肉食獣

カルスト大地の岩の裂け目に住む、肉食性の哺乳類。イタチ科のテンの子孫だが、樹上生活に適応していたテンと異なり、岩場の生活に適した姿へと進化している。樹上でバランスをとるための長い尾と、枝から枝へ体を持ち上げるための足の筋肉はなくなり、狭い裂け目を敏捷に走り回ることができるような細長い体になった。あごの下まで伸びるサーベル状の犬歯を持ち、地上を歩く小型のイノシシ、スクローファの子どもなどを獲物とする。体が小さいので、スクローファの成獣を襲うことはできない。

No.02 スノーストーカー
snowstalker



極寒を生きる大型イタチ

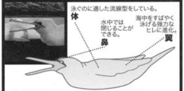
ツンドラ帯に生息する大型肉食動物。現代のイタチ科のクズリという動物を祖先に持つが、体はずっと大型化している。主に大型げっ歯類のシャグラットを獲物としているが、ツンドラ地域に大型草食動物の数は多くないため、一度シャグラットの群れを見つけると、何日もその後をつけまわして機会を窺う。現代のサーベルタイガーのような巨大な犬歯で獲物を突き刺して仕留める。祖先のイタチと同様、群れを作らず単独で行動し、十数平方キロにおよぶ広いなわばりを持つ。雌は夏の始まりに一頭の子を産み、暖かい季節に育てる。

No.01 シャグラット
shagrat

氷河期を生きる大型のげっ歯類

北米ツンドラで最大の哺乳類。現代のヒツジほどの大きさで、長く分厚い体毛を持ち、ジャコウウシのような姿をしている。現代のマーモット(小型の穴居性げっ歯類)が祖先。氷河期が訪れて寒くなった地球環境にあわせて大型化し、体熱が奪われにくい体に進化した。平原を群れで移動し、夏と冬とで餌場を変える。前肢のかぎづめで土を掘り、大きな歯で植物の根をかじりとって食べる。スノーストーカーなどの大型肉食獣に襲われたときは、成獣が外側に顔を向けてぐるりと円陣を組み、その中心に幼い子を囲んで守る。

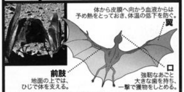
No.03 ガネットホエール
gannetwhale



クジラ並みに巨大化した海鳥

アザラシやアシカが絶滅した後、その地位をひきついだ巨大な海鳥。海中を泳ぐこともできた大型の海鳥カツオドリを祖先に持つ。セイウチに似た姿で、大きすぎるためもはや飛ぶことはない。ヒレに進化した翼を使って時速30キロもの速さで海中を泳ぎ、魚を捕らえる。分厚い脂肪層と羽毛が、厳寒の海から体を守っている。大型肉食獣スノーストーカーの襲撃を避けるため、離島に巣を作る。母鳥は産んだ卵を足ではさんで尾の下に置き、自分の体温で温かく保つ。父鳥は漁に出かけて、母鳥や雛の食料を捕って戻ってくる。

No.11 デスグリーナー
deathgleaner



太陽の下で飛び回る巨大コウモリ

翼を広げると1.3mにもなる巨大なコウモリ。現代のコンドルの地位を引き継いで、ロッキー山脈の洞窟や谷間に暮らす。鳥のような長いかぎづめで、スピンクなどの動きの遅い動物をとらえることもあれば、広い範囲を飛び回って見つけた腐肉をあさることも。太陽が地面を温めることで起きる上昇気流に乗って遠くまで飛ぶため、ほかのコウモリと異なり、日中だけ活動する。たくさんの獲物にありついたときはねぐらで仲間とえさを分け合う。食べものが極端に少なくなったときは新陳代謝を下げて休眠する。

No.10 スピンク
spink

モグラのような生活を選んだ鳥

ウズラ類を祖先とする穴居性の鳥の仲間。過酷な気候を生き延びるために地下で暮らす。飛行能力はない。翼は土を掘るための前肢へと姿を変え、関節は左右の前肢を交互に前に出せるように進化した。ひじで這って歩き、地中に埋まった植物の塊茎を食べる。1匹の女王を中心とした集団生活（コロニー）を営む。女王だけが生殖活動に携わり、ほかの個体は、女王とその子を養うために働く、いわば「働きアリ」。広範囲にわたる網の目状のトンネルと部屋を作り、さえずりでコミュニケーションする。地上に出るのは夜のみ。

No.08 カラキラー
carakiller

身長2mを超える飛べない鳥

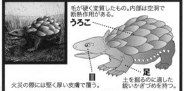
アマゾン草原最速の巨大な鳥。雑食性で環境の変化に強かった、ハヤブサの一種であるカラカラを祖先に持つ。大型化して捕食者がいないため、ダチョウなどと同様に飛行能力は手放してしまった。集団で狩りをする。視点が高いので遠くまで見渡すことができ、獲物を見つけると、飾り羽を使って仲間と連絡を取り合い、すばやく走りよって、前脚の長いかぎづめで捕らえる。しばしば起こる草原の大火事の際には、逃げ惑う動物を火の際で待ち伏せて襲ったり、火の通り過ぎた後を歩いて、黒こげになった肉をついばむ。

No.07 バブカリ
babookari

樹から降りた地上最後のサル

地球に生き残った最後の霊長類。現代のウアカリ（南米のオマキザル）を祖先に持つ。祖先が雑食性だったために環境の変化に強く、アマゾンの密林消失後、草原の生活に適応した。知能も大きく発達しており、器用な指を使って草で球形の籠を編み、川の中に沈めて魚がかかるのを待つほど。数十頭の群れを作って暮らし、えさ探しも敵の発見も仲間で協力しあう。祖先にはなかった長い尾を持ち、仲間とコミュニケートする。尾の先を草の上に出して揺らすことで仲間へ合図を送るが、草に紛れて他の動物には気づかれない。

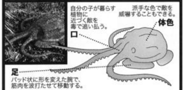
No.09 ラトルバック
rattleback



火災を鎧でやりすごすげっ歯類

アマゾン草原に住む、現代のカワウソほどの大きさのげっ歯類。アルマジロに似ているが、南米の森林に住んでいた穴居性の大型げっ歯類パカの子孫。この草原では火災がたびたび起こるが、その際はうろこをぴったりと閉じて、あたりの土のなかに体を埋める。敵に襲われたときも同様にして身を守る。雑食で、植物のふくらんだ地下茎や火災で死んだ動物、飛ばない大型鳥カラキラーの卵などを食べる。北米大陸に渡って寒冷な砂漠へ適応した別の種もいる。そちらの種は草食性で、体がより大きく、うろこはそれほど重厚ではない。

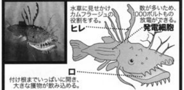
No.16 スワンパス
swampus



陸上で子育てをするタコ

タコの子孫。呼吸は水中でするが、体の組織や血液に酸素を蓄えることができ、4日間は連続して陸に上がっていることができる。陸上では、長く伸びた4本の腕とパッド状の足に進化した残り4本の腕で移動する。体色を自在に変えてカムフラージュし、大型の昆虫や小型の脊椎動物を捕らえて食べる。交尾は水中で行うが、卵は陸上の花瓶状の植物の根元にできる水溜りのなかに産み落とす。母親が自分の尿でその水溜りの水質を整え、そこで子どもを育てる。母親が呼吸のために水中に戻るときには、別の母親が代わりに子守りする。

No.15 ルークフィッシュ
lurkfish



1000ボルトの電流で狩りをする魚

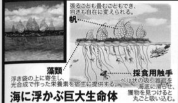
ベンガル沼地の沼底に住む体長4mの巨大魚。朽ちた丸太のような外見で、周りの環境に紛れて目立たない。変温動物のため頻繁に食べる必要がなく、沼底にじっと横たわって何日も獲物を待ち伏せ、気づかずにそばを通った魚などをすばやく捕らえる。にごった沼は見通しがきかないが、水中のわずかな動きも感じ取るひげを持つ。現代のデンキナマズのように、体側に発電細胞と呼ばれる特殊な筋肉細胞を持ち、大きな獲物を強力な電気ショックで麻痺させ、巨大な口と鋭い歯で沼の中にひきずりこんで食べる。

No.17 トラトン
toraton

地球史上最大の陸生動物

古代のリクガメを祖先にもつ、巨大なカメ。体高は7メートル、体重は現代のゾウの24倍、120トンにおよぶ。植物の豊かな温かい沼地に暮らし、ほとんど一日中を採食に費やす。一日に食べる植物の量は約600キロ。体が大きく、捕食される心配もないので、身を守るための甲羅は不要だが、細い肋骨や脊柱だけではこの巨体を支えきれないため、ところどころ残った甲羅が体を外側から支えている。卵の殻は非常に硬く、母親がくちばしで殻にひびを入れて孵化させる。子どもは5年ものあいだ、両親が世話をする。健康な個体の寿命は約120歳。

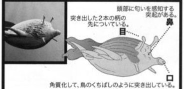
No.13 オーシャンファントム
ocean phantom



海に浮かぶ巨大生命体

体長10m、幅4mにもなる、クジラ並みの巨大クラゲ。カツオノエボシと呼ばれるクラゲの子孫。何千もの小さな個体が集まって一つの生命体を作っている。それぞれの個体が採食や移動、防御、センサーなどの異なる役割を担い、高度に発達した神経系がこの複雑な分業を支える。体の中心となる巨大浮き袋には水の通る管を張り巡らせた帆を備え、ヨットのように風を切って進むことも、無風の際にはジェット水流で進むこともできる。嵐で体がバラバラにちぎれても、その一片一片がもとになって新たに再生する。

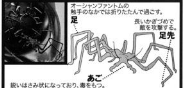
No.12 リーフグライダー
reef glider



リーフを泳ぎまわる大型ウミウシ

「海のなめくじ」と呼ばれたウミウシの子孫。もとは体長数cm程度だったが、現代のアザラシほどに大型化した。3対のひれを発達させ、水中を自由に泳げる。丸みを帯びた滴形の体で、体色は祖先同様に鮮やか。えらは長いリボン状で体の外に露出しており、後ろにたなびかせて泳ぐ。魚のような浮き袋はないが、体液が海水より軽いので水中で浮くことができる。子どもは紅藻が作ったリーフ(礁)で、紅藻の蜜(タンパク質と炭水化物)を食べて育つ。成長すると外海に出て、肉食となる。繁殖期にはリーフへ戻ってくる。

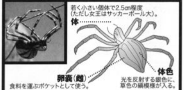
No.14 スピンドルトルーパー
spindletrooper



巨大クラゲが雇った兵隊グモ

ウミグモの子孫。10cmほどであった現代のウミグモより大型化しており、足を開くと30cmほどになる。もともとはリーフで暮らしていたが、オーシャンファントムとの共生関係を発達させた。ふだんはファントムのベル状の触手の内部に集団で暮らし、外敵に襲われることはない。空腹になると、触手の内壁をひっかく。するとファントムの本体から食べ物が流れ落ちてくる。宿主のファントムがおとなのリーフグライダーなどの敵に襲われたときには、触手のなかからいっせいに出てきて、かぎづめと大きなあごで敵を撃退する。

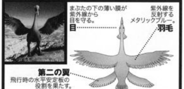
No.23 シルバースパイダー
silver spider



幅30mもの巨大な巣をかけるクモ

女王グモを頂点として集団で共同生活を営むクモ。体の小さい若いクモが、風に流されて飛んできた綿毛の種子につかまって、糸を吐きながら長い峡谷を渡る。それを足場にしてほかのクモが24kmもの糸を使い、幅30mにおよぶ巨大な巣を作る。風に吹き流されて網にかかった種子などを食料係が集める。クモたちの食料は家畜として養っている小型げっ歯類のポグル。種子はポグルの餌として集められている。女王グモは肉を食べるだけでなく、妊娠した雌のポグルの血を吸う。雌の血中ホルモンが女王の産卵を促すためである。

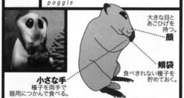
No.22 グレートブルーウインドランナー
great blue windrunner



2対の翼で飛行法を使い分ける鳥

ツルの子孫。標高10000mの山々が囲む高原地帯、グレートプラトーに住む大型の鳥。ほとんどの時間を空を飛んで過ごす。遠くまで飛ぶのに適した細長く大きな翼を持ち、上昇気流を利用して高速で滑空する。長時間の休息は不要で、風に流されながら数分間の睡眠をとる。クモなどのえさをとらえるために急降下するときには、後方にある肢を横に広げ、もう1対の翼として利用する。この前後幅のある小さな翼が、低速飛行時の機動性を高める。捕食者が容易に近づけない高い場所に巣を作って子どもを育てる。

No.24 ポグル
poggle



家畜となった地球最後の哺乳類

現代のハムスターに近い、小型のげっ歯類。1億年後の地上に生き残った最後の哺乳類である。グレートプラトーの峡谷に暮らし、岩の割れ目のなかにある巣穴で種子を食べて一生を過ごす。繁殖力は非常に強く、たくさんの子どもを産む。種子はシルバースパイダーが集めてきてふんだんに供給するため、自分で食物を探したり、移動したりする必要はない。養い主であるクモは時折り、太った個体を選んで、麻痺性の毒を刺し込む。毒液に含まれる酵素によって体の組織の分解が始まり、そのままクモに食べられてしまう。

No.19 スピットファイアバード
spitfire bird

襲ってくる敵に毒を吹きかける鳥

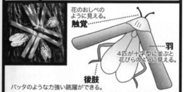
南極森林に住むフラッターバードの一種。ローチカッターより一回り大きく、オレンジ色の羽を持つ。昆虫食。ホバリングしながらスピットファイアツリーの花から化学物質を集め、のどにある袋に蓄える。同時に、花の受粉にも貢献する。敵に襲われると、自身の体内で分泌した酵素と花から集めた物質とを混ぜ合わせ、熱くて強力な腐食性の毒液に換え、鼻の穴から吹きかけて撃退する。別種のスピットファイアバードモドキは毒を持たないが、外見をよく似せることで、他の動物から襲撃を受ける危険を減らしている。

No.18 ローチカッター
roachcutter

ジャングルを飛び回る極彩色の鳥

ホバリングができるフラッターバード類の一種で、現代のスズメほどの小さな鳥。祖先は現代の南極周辺に住んでいた大型の海鳥ミズナギドリ。暖かい気候の森林生活に適応して体が小型化していった。鮮やかな紫色の体に、深い青とエメラルドグリーンで色分けされた翼を持つ。くちばしが非常に丈夫で、硬い外皮を持った昆虫も砕いて食べる。翼は左右幅が短く前後幅が長いため、うっそうと茂った森の中でも急な方向転換が可能。捕食者が近づくと、弾丸のように木々の間を抜けてすばやく飛び去る。

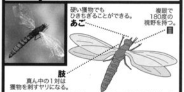
No.21 スピットファイアビートル
spitfire beetle



4匹1組で花に化けて鳥を襲う虫

花に擬態して狩りをする大型の甲虫。4匹が頭を寄せて十字に陣形を組み、オレンジと黄の羽を広げてスピットファイアツリーの花に見せかけ、スピットファイアバードをおびき寄せる。本物の花と間違えた鳥が近づくと瞬時に飛びかかって捕らえ、強力なあごと前肢のかぎづめで鳥の体を砕く。獲物は4匹で分け合う。花の季節が終わると繁殖のためにそれぞれ別行動を始める。交尾後、雄はすぐに死に、雌はスピットファイアツリーの樹皮に卵を4つずつ産んでまわる。卵から孵った4匹は、チームを形成して花の擬態を始める。

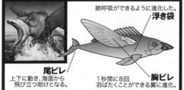
No.20 ファルコンフライ
falconfly



鳥を襲う体長35cmの巨大ジガバチ

体長2cmほどだった現代のジガバチの子孫。従来、昆虫は肺を持たないため大型化できなかったが、この時代に地球の大気中の酸素濃度が高くなり、地球史上最大級の昆虫が誕生した。現代の猛禽類ほどの大きさで、肉食。主にフラッターバードを襲う。一番前と一番後ろの2対の肢にあるかぎづめでホバリングしている鳥をがっちりとつかみ、真ん中の1対の肢をそろえて銛のように突き刺す。内臓を貫かれた鳥とともに地面に落ち、地上で獲物をバラバラに引き裂いて食べる。残りは巣穴の子どもに運ぶ。3～4匹の子どもを1匹ずつ別の巣穴で育てる。

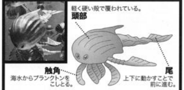
No.30 オーシャンフリッシュ
ocean flish



鳥のように空を飛びまわる魚

タラ科の魚の子孫。肺呼吸ができ、胸ビレから進化した強靭な翼で空中を飛行する。すでに絶滅した海鳥とよく似た生態で、海で狩りを行い、巣は陸上に作る。鋭い歯を備えたあごを右へ左へと自在に突き出して、波間を泳ぐ獲物をくわえとる。ウロコは海面に浮かんで休むときに水をはじき、体温を保つ。無数の種に進化しており、体のサイズは現代のアジサシ程度の小さなものからトウゾクカモメほどの大型な種までさまざま。種によって狙う獲物も異なるが、主に甲殻類のシルバースイマーやプランクトンなどを食べる。

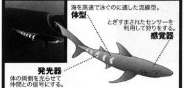
No.29 シルバースイマー
silverswimmer



魚の地位を引き継いだ甲殻類

地球海全体に分布する、カニやロブスターなどの子孫。絶滅した硬骨魚の地位を引き継ぎ、海の主要な生物となった。かつての魚と同様にさまざまな環境に適応して、ごく小さなものから小型のクジラ並みのものまで9000種以上に多様化している。現代のカレイのように海底に暮らす平たい形のもの、獰猛なハンタータイプ、プランクトンを食す大型種、ほかのシルバースイマーに寄生するものなど種々なタイプがいる。幼生の段階でも生殖が可能。夏には何千個もの卵を産み、卵は4日間にわたって地球海をただよう。

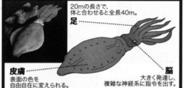
No.32 シャークオパス
sharkopath



体を光らせて仲間と連携するサメ

地球海を集団で回遊するサメ。現代より4億年前から基本的な体型は変わっていない。広大な地球海で効率的に獲物を探すために集団で狩りをする。体側に生物発光性の器官を持つ。群れは広い範囲を散開してまわり、1匹が獲物を見つけると、発光器で近くの1匹に知らせ、さらにそれを別の1匹に知らせるという形で群れ全体に情報が行き渡ると、一斉に襲い掛かる。全長40mのレインボースクイドをも襲う。きわめてすぐれた感覚器官を持ち、逃げようとする獲物の位置は正確にとらえることができる。

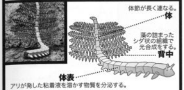
No.31 レインボースクイド
rainbow squid



体色を自由自在に変える巨大イカ

頭足類。全長40mの地球海最大の動物。色素胞（皮膚表面にある色素を含む嚢）によって体色を自由に変えられる。高度に発達した脳が周囲の環境に敏感に反応し、皮膚の色を変える指示を出す。獲物を捕らえるときや捕食者から逃げるときには海の色に溶け込むようにカムフラージュする。敵を派手な色で威嚇し、雄は鮮やかな色で雌の気を引く。互いにコミュニケートする手段でもあり、血縁のあるもの同士は共通のディスプレイパターンがある。発光性の細菌を共生させて光の点滅を作る種もある。寿命は100歳ほど。

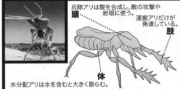
No.26 ガーデンワーム
garden worm



体内で藻に光合成をさせる虫

体長45cm、体高3.5cmほどの多毛類。現代のゴカイやイソメなどの子孫。もともとは海生の動物だったが、中央砂漠の環境に適応して岩の割れ目や地下の洞窟に暮らす。体はたくさんの体節から成り、頭と尾を除いた体節からシダのような形の組織が左右に伸びる。組織のなかには緑藻が詰まっている。藻とは共生関係にあり、一日に一回は地上に出てその組織を広げ、藻に日光を当てる。代わりに、藻が光合成をして作りだした栄養分を得る。外に出ると、テラバイツに襲われて組織ごと藻をむしりとられることもある。

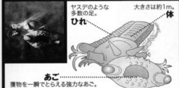
No.25 テラバイツ
terabyte



仕事によって姿が全く異なるアリ

中央砂漠に暮らすアリ。現代のシロアリから進化した。繁殖を担う女王を頂点にした共同生活を営み、役割ごとに特定の器官を発達させている。砂などを固めて小さな塔を作るアリ、内部のトンネルや部屋、地下水につながる井戸を掘るアリ、地下水を飲んで体に溜めコロニー内に水を配るタンクアリ、幼虫にえさを食べさせる子守アリ、敵に強い酸を吹きかけて撃退する兵隊アリなどがいる。上記のすべてのアリたちは肢を持っておらず、移動は肢を発達させた運搬アリが担う。塔内に温室を作り、藻類に水をやって育て、食料とする。

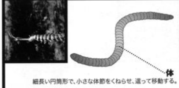
No.28 スリックリボン
slickribbon



地下貯水池の獰猛なハンター

現代のヤスデに似た、巨大な多毛類。中央砂漠の地下貯水池に住む。体長は1mほど。細かい節に分かれた体の左右には、体節ごとに毛の生えたヒレ状の足が一組ついていて、このヒレを波打たせて水中をすばやく泳ぐ。肉食で、主に、洞窟の壁を這い回る、小型多毛類のグルームワームを獲物とする。薄暗い水の中に潜み、気づかずに水面に近づいた獲物を、口の先についた瞬時に伸縮するあごで捕らえる。もう少し大型のガーデンワームも狙うが、すばやく泳ぎ去ってしまうことも多いために、狩りの成功率はそれほど高くない。

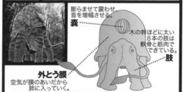
No.27 グルームワーム
gloomworm



洞窟生活に適応したミミズの仲間

中央砂漠の地下洞窟に暮らす、現代のミミズに似た小型の多毛類。かつてこの地域が浅海だったときから生息していた海生の多毛類が、気候変動と大陸移動によって海水面が下がったときに逃げ出すことができず、砂漠の地下に広がる洞窟環境に適応して生き延びた。洞窟内には植物が育たないが、岩の硫黄化合物を分解する際に発生したエネルギーを利用して繁殖する緑色の細菌が広がっており、それを主食とする。洞窟の池には大型の捕食者がいるため、できるだけ地下水面から離れたところで生活する。

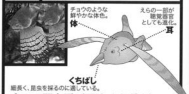
No.38 メガスクイド
megasquid



森をのし歩く体重8トンのイカ

陸生のイカ、テラスクイド類の一種。ドーム型の外とう膜の下の空洞部分が肺に進化し、空気中で呼吸できる。体高は現代のゾウほどで、体重は8トン。この時代の最大陸生動物だ。骨格を持たず、筋肉で体を支えており、人間が歩くほどのスピードで8本足歩行をする。長さ2mの触腕を持ち、器用にものをつかむ。雑食だが、変温動物のため、それほど食べない（現代のゾウが食べる量の10分の1程度）。体内の膜組織を震わせて声を出し、額にある嚢で増幅してなわばりを主張する。脳は400g程度と体に比して小さい。

No.37 フォレストフリッシュ
forest flish



木々の間を飛び回り、さえずる魚

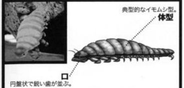
北部森林に住む魚。近縁種の海に住むオーシャンフリッシュと同様、浮き袋を肺に、胸ビレを翼に進化させて、現代の鳥と似た生活を営む。昆虫食。1秒間に30回羽ばたき、ホバリングができる。木に留まるときは、腹ビレの先についた大きなかぎづめで頭を下にしてぶら下がる。眠るときも同じ体勢。かつてえらのあった部分が音を出す器官へ進化し、ギーギーという音を立てて鳴く。木々の枝からカーテンのように垂れ下がったスライム状の粘菌スリザーサッカーにひっかかると、からめとられて消化されてしまう。

No.39 スクイボン
squibbon

知性を備え、仲間と助け合うイカ

小型のテラスクイド類。骨格がないため筋肉で体を支え、肺で呼吸をする。北部森林の高い木の茂みの中に巣を作る。樹上の移動は、木の枝を腕でつかみ、鉄棒の「大車輪」のようにぶらさがって回転しながら次の枝へとすばやく渡る。基本的に植物食。発達した脳を持つため、立体視や道具の使用が可能。子育てを共同で行ない、食べものを互いに分け合うなど、高度な社会生活を営む。音で互いにコミュニケーションをとる。メガスクイドなどの襲撃があれば、木の枝を投げ下ろすなど武器を使って撃退する。

No.34 グリムワーム
grimworm



雌雄に分かれ繁殖を担うイモムシ

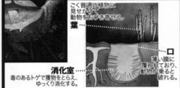
バンブルビートルの幼虫。レインシャドー砂漠でオーシャンフリッシュの死骸を食べて育つ。親から運ばれてフリッシュに潜りこんだ幼虫は単為生殖で繁殖し、数を大幅に増やす。生まれてくる雄は数匹で、残りはすべて雌。雌の一匹が大きく成長して10-15gになる。雌たちはそのまま留まり、雄は外に出て別のフリッシュの死骸にいる雌と交尾をする。交尾を済ませた大きな雌はほかの雌と雄を食べ、フリッシュの体も食べつくすとさなぎになる。さなぎから出た成虫、バンブルビートルは腹に幼虫を抱えて飛び立つ。

No.33 バンブルビートル
bumblebeetle

24時間の寿命で子どもを運ぶ昆虫

現代のスズメほどの大きさの昆虫。幼虫を腹に抱えて、最大で約800kmの距離を丸一日飛び続ける。体の40%は幼虫のときに蓄えた脂肪。体中にある優れた嗅覚器官で、海岸の巨大な嵐で巻き上げられてレインシャドー砂漠に落ちてくるオーシャンフリッシュの死骸を探す。たどりつくと腹部がくずれ、幼虫が出てきてフリッシュに移る。成虫の寿命は24時間で、ものを食べないため口にあたる器官がない。もし飛び始めて数時間のうちに死骸を見つけられないときには、一部の幼虫を消化してエネルギーに変え、残りの幼虫を運ぶ。

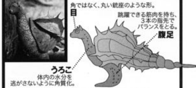
No.36 デスボトルプラント
death-bottle plant



砂漠の地中にひそむ肉食の植物

動物をとらえて栄養とする植物。地上部では葉が茂り、光合成も行なう。地下部には大きな空洞があり、その口は薄い膜でふさがれている。地上部の草にデザートホッパーなどの草食動物が寄ってくるとその膜が破れて穴に転落する。毒のあるトゲが刺さって穴から出られなくなった獲物を数日かけて消化する。膜も数日で再生する。自家受粉で種子をつくり、フリッシュと見た目もにおいもそっくりの葉でバンブルビートルをおびきよせ、粘着性の種子のつまった部屋に落ち込ませてすぐに外に放り出し、種子を運び出させる。

No.35 デザートホッパー
desert hopper



ジャンプで移動するカタツムリ

レインシャドー砂漠に住む大型のカタツムリ。直立してジャンプすることのできる筋肉質の足を発達させた。立ち上がったときの体長は30cmほど（殻のサイズは20cm）。人間のジョギングと同じくらいのスピードですばやく移動し、広い範囲で植物を食べて回る。ジャンプによって肺に新鮮な空気を送り込み、熱砂に触れる時間を減らしている。口にはドリルのような歯列を備え、硬い植物の外皮に穴を開けて内部のやわらかい髄を食べる。数時間で一つの茂みを食べつくす。水を飲むことはなく、口にする植物から水分を補給している。

著者紹介

ドゥーガル・ディクソン
Dougal Dixon

1947年スコットランド生まれ。
セント・アンドリュース大学にて地質学を学ぶ。
出版社勤務を経て80年よりフリーのサイエンス・ライターとして活躍。
日本でも話題になった「アフターマン」をはじめ、
数多くの著書がある。

ジョン・アダムス
John Adams

自然史関係の人気テレビ番組を数多く手がける。
ディズニー向けに制作された
「Amazing Animals」などで受賞歴あり。

小川隆章
おがわ・たかあき

アフタヌーン四季賞でデビュー。
海洋生物漫画「渺々(びょうびょう)」で、
ネイチャーコミックの旗手として好評を博す。

初出

漫画アクション　2006年　2月21日号
漫画アクション　2006年　3月7日号
漫画アクション　2006年　5月16日号
漫画アクション　2006年　7月18日号
漫画アクション　2006年　9月19日号
漫画アクション　2006年　11月21日号
漫画アクション　2007年　1月23日号
漫画アクション　2007年　3月20日号

本書は、下記単行本を基にコミック化したものです。

「フューチャー・イズ・ワイルド」
「フューチャー・イズ・ワイルド 完全図解」
（いずれも、発行：ダイヤモンド社）

フューチャー・イズ・ワイルド コミック版

驚異の進化を遂げた2億年後の生命世界

2007年4月30日　第1刷発行

著者	ドゥーガル・ディクソン
	ジョン・アダムス
作画	小川隆章
装幀	こじままさき *for BodyDouble inc.*
編集協力	村田興宣／クリス・ブレアム（*Rights World Agency*）、
	江口絵理、土江英明／宮田和美（ダイヤモンド社）
編集担当	加納由樹
印刷・製本	三晃印刷株式会社
発行者	佐藤俊行
発行所	双葉社
	〒162-8540　東京都新宿区東五軒町3-28
電話	03-5261-4844（編集）　03-5261-4818（営業）
	http://www.futabasha.co.jp/

落丁・乱丁本は小社にてお取替えいたします
定価はカバーに表示してあります
ISBN 978-4-575-29971-7 C0079
Printed in Japan

Copyright © Takaaki Ogawa
Under license of THE FUTURE IS WILD ®
Adapted from the book THE FUTURE IS WILD, Copyright ©The Future is Wild® 2003, published in Japan by Diamond, Inc. arranged by Rights World Agency
The Future is Wild name and logo are registered trademarks of The Future is Wild Ltd.